

Sun Server X2-4 (旧 Sun Fire X4470 M2)

設置ガイド

このソフトウェアおよび関連ドキュメントの使用と開示は、ライセンス契約の制約条件に従うものとし、知的財産に関する法律により保護されています。ライセンス契約で明示的に許諾されている場合もしくは法律によって認められている場合を除き、形式、手段に関係なく、いかなる部分も使用、複写、複製、翻訳、放送、修正、ライセンス供与、送信、配布、発表、実行、公開または表示することはできません。このソフトウェアのリバース・エンジニアリング、逆アセンブル、逆コンパイルは互換性のために法律によって規定されている場合を除き、禁止されています。

ここに記載された情報は予告なしに変更される場合があります。また、誤りが無いことの保証はいたしかねます。誤りを見つけた場合は、オラクル社までご連絡ください。

このソフトウェアまたは関連ドキュメントを、米国政府機関もしくは米国政府機関に代わってこのソフトウェアまたは関連ドキュメントをライセンスされた者に提供する場合は、次の通知が適用されます。

U.S. GOVERNMENT END USERS. Oracle programs, including any operating system, integrated software, any programs installed on the hardware, and/or documentation, delivered to U.S. Government end users are "commercial computer software" pursuant to the applicable Federal Acquisition Regulation and agency-specific supplemental regulations. As such, use, duplication, disclosure, modification, and adaptation of the programs, including any operating system, integrated software, any programs installed on the hardware, and/or documentation, shall be subject to license terms and license restrictions applicable to the programs. No other rights are granted to the U.S. Government.

このソフトウェアもしくはハードウェアは様々な情報管理アプリケーションでの一般的な使用のために開発されたものです。このソフトウェアもしくはハードウェアは、危険が伴うアプリケーション(人的傷害を発生させる可能性があるアプリケーションを含む)への用途を目的として開発されていません。このソフトウェアもしくはハードウェアを危険が伴うアプリケーションで使用する際、安全に使用するために、適切な安全装置、バックアップ、冗長性(redundancy)、その他の対策を講じることは使用者の責任となります。このソフトウェアもしくはハードウェアを危険が伴うアプリケーションで使用了ことに起因して損害が発生しても、オラクル社およびその関連会社は一切の責任を負いかねます。

Oracle および Java は Oracle Corporation およびその関連企業の登録商標です。その他の名称は、それぞれの所有者の商標または登録商標です。

Intel, Intel Xeon は、Intel Corporation の商標または登録商標です。すべての SPARC の商標はライセンスをもとに使用し、SPARC International, Inc. の商標または登録商標です。AMD, Opteron, AMD ロゴ、AMD Opteron ロゴは、Advanced Micro Devices, Inc. の商標または登録商標です。UNIX は、The Open Group の登録商標です。

このソフトウェアまたはハードウェア、そしてドキュメントは、第三者のコンテンツ、製品、サービスへのアクセス、あるいはそれらに関する情報を提供することがあります。オラクル社およびその関連会社は、第三者のコンテンツ、製品、サービスに関して一切の責任を負わず、いかなる保証もいたしません。オラクル社およびその関連会社は、第三者のコンテンツ、製品、サービスへのアクセスまたは使用によって損失、費用、あるいは損害が発生しても一切の責任を負いかねます。

目次

はじめに	7
1 サーバーの設置準備	11
必要な工具および装置	11
サーバー設置タスクのチェックリスト	12
梱包を開く	13
サーバーの梱包内容	13
オプション	14
静電気放電に関する注意事項	14
サーバーの説明	14
フロントパネルの機能	14
バックパネルの機能	15
サーバーがサポートする部品	16
Sun Server X2-4 でサポートされる部品と機能	16
サーバーの仕様	19
物理仕様	19
電氣的仕様	19
環境要件	20
サーバーの管理	20
2 スライドレールによるサーバーのラックへの取り付け	23
始める前に	23
サーバー設置プロセスの概要	23
ラックの互換性	24
スライドレールの分解	26
▼スライドレールの分解	26
サーバーへの取り付けブラケットの取り付け	27

▼ 固定部品の取り付け	27
ラックへのスライドレール構成部品の取り付け	29
▼ スライドレール構成部品の取り付け	29
スライドレール構成部品へのサーバーの取り付け	33
▼ スライドレール構成部品へのサーバーの取り付け	33
ケーブル管理アームの取り付け	35
▼ ケーブル管理アームの取り付け	35
スライドレールと CMA の動作の確認	40
▼ スライドレールと CMA の動作の確認	40
3 ケーブルと電源コードの接続	41
バックパネルのコネクタとポート	41
サーバーへのケーブルの接続	42
▼ サーバーのケーブル接続	42
サーバーへの電源コードの接続	43
▼ 電源コードの接続	43
4 Oracle ILOM への接続とサーバーへの主電源の投入	45
Oracle ILOM への接続	45
ネットワークのデフォルト設定	46
▼ ローカルのシリアル接続を使用した Oracle ILOM へのログイン	46
▼ リモート Ethernet 接続を使用した Oracle ILOM へのログイン	47
▼ Oracle ILOM CLI でのネットワーク設定の変更	48
▼ Oracle ILOM Web インタフェースでのネットワーク設定の変更	52
▼ Oracle ILOM CLI からの IPv4 または IPv6 ネットワーク構成のテスト	54
▼ Oracle ILOM Web インタフェースからの IPv4 または IPv6 ネットワーク構成のテスト	55
▼ Oracle ILOM の終了	56
サーバーへの主電源の投入	56
▼ サーバーへの主電源の投入	56
▼ 主電源の切断	56
5 インストール済みの Oracle Solaris OS または Oracle VM ソフトウェアの構成	59
オペレーティングシステムのオプション	59
Oracle Solaris 構成の準備	61

インストール済みの Oracle Solaris オペレーティングシステム上での RAID の制限	61
Oracle Solaris 10 および 11 の構成ワークシート	61
インストール済みの Oracle Solaris 11 オペレーティングシステムの構成	65
▼ インストール済みの Oracle Solaris 11 オペレーティングシステムの構成	65
Oracle Solaris 11 オペレーティングシステムのドキュメント	68
インストール済みの Oracle Solaris 10 オペレーティングシステムの構成	68
▼ インストール済みの Oracle Solaris 10 オペレーティングシステムの構成	69
Oracle Solaris 10 オペレーティングシステムのドキュメント	71
Oracle Solaris 10 または 11 オペレーティングシステムの再インストール	72
Oracle Solaris オペレーティングシステムのダウンロード	72
Oracle VM 構成の準備	73
インストール済みの Oracle VM Server の互換性要件	73
Oracle VM 構成ワークシート	73
インストール済みの Oracle VM 3.0 ソフトウェアの構成	74
▼ インストール済み Oracle VM Server の構成	75
Oracle VM のドキュメント	78
 6 オペレーティングシステムのインストール	79
オペレーティングシステムのインストール	79
 7 サーバーファームウェアとソフトウェアの入手	81
ファームウェアとソフトウェアの更新	81
ファームウェアとソフトウェアへのアクセスオプション	82
入手可能なソフトウェアリリースパッケージ	82
ファームウェアとソフトウェアへのアクセス	83
▼ My Oracle Support を使用したファームウェアとソフトウェアのダウンロード	83
物理メディアのリクエスト	84
更新のインストール	87
ファームウェアのインストール	87
ハードウェアドライバと OS ツールのインストール	88
 索引	89

はじめに

この設置ガイドでは、ハードウェアの設置手順と Sun Server X2-4 の構成手順を説明します。これらの手順を実行すると、サーバーが構成および使用可能な状態になります。

注 – Sun Server X2-4 は以前は Sun Fire X4470 M2 サーバーという名前でした。この以前の名前が、まだソフトウェアに表示されることがあります。新しい製品名は、システム機能の変更を示すものではありません。

このドキュメントは、サーバーシステムを理解しているシステム管理者、ネットワーク管理者、およびサービス技術者を対象としています。

- [7 ページの「最新のソフトウェアとファームウェアの入手」](#)
- [8 ページの「このドキュメントについて」](#)
- [8 ページの「関連ドキュメント」](#)
- [8 ページの「フィードバック」](#)
- [8 ページの「サポートとアクセシビリティ」](#)

最新のソフトウェアとファームウェアの入手

Oracle x86 サーバー、サーバーモジュール (ブレード)、およびブレードシャーシのファームウェア、ドライバ、およびその他のハードウェア関連ソフトウェアは、定期的に更新されています。

手順については、[第7章「サーバーファームウェアとソフトウェアの入手」](#)を参照してください。

このドキュメントについて

このドキュメントセットは、PDF および HTML の両形式で利用できます。特定のトピック (ハードウェア設置やプロダクトノートなど) に関するすべての情報が含まれる PDF バージョンを生成するには、HTML ページの左上にある PDF ボタンをクリックします。

関連ドキュメント

ドキュメント	リンク
すべての Oracle ドキュメント	http://www.oracle.com/documentation
Sun Server X2-4	http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=SunFireX4170M3
Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0	http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=ilom30
Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.1 (Sun Server X2-4 ソフトウェアリリース 1.3 以上用)	http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=ilom31
Oracle Hardware Installation Assistant	http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=hia

フィードバック

次でこのドキュメントについてのフィードバックをお送りいただけます。

<http://www.oracle.com/goto/docfeedback>

サポートとアクセシビリティ

説明	リンク
My Oracle Support を通じた電子的なサポートへのアクセス	http://support.oracle.com 聴覚障害の方へ: http://www.oracle.com/accessibility/support.html
アクセシビリティに対する Oracle のコミットメントについて	http://www.oracle.com/us/corporate/accessibility/index.html

サーバーの設置準備

注 – Sun Server X2-4 は以前は Sun Fire X4470 M2 サーバーという名前でした。この以前の名前が、まだソフトウェアに表示されることがあります。新しい製品名は、システム機能の変更を示すものではありません。

この章では、Oracle の Sun Server X2-4 ハードウェアを解説し、サーバーをラックに設置する前に知っておくべき情報を説明します。ここでは、次のトピックについて説明します。

- 11 ページの「必要な工具および装置」
- 12 ページの「サーバー設置タスクのチェックリスト」
- 13 ページの「梱包を開く」
- 14 ページの「静電気放電に関する注意事項」
- 14 ページの「サーバーの説明」
- 16 ページの「サーバーがサポートする部品」
- 19 ページの「サーバーの仕様」
- 20 ページの「サーバーの管理」

必要な工具および装置

システムを設置するには、次の工具が必要です。

- プラスのねじ回し (Phillips の 2 番)
- ESD マットおよびアースストラップ

また、次のいずれかのようなシステムコンソールデバイスも必要です。

- ワークステーション
- ASCII 端末
- 端末サーバー
- 端末サーバーに接続されたパッチパネル

サーバー設置タスクのチェックリスト

表 1-1 に、サーバーを正しく設置するのに必要なタスクを順番に示します。

表 1-1 設置タスクのチェックリスト

ステップ	タスクの説明	手順については、次を参照してください。
1	サーバーおよびサーバー用に注文したオプションのコンポーネントを梱包から取り出します。	■ 13 ページの「梱包を開く」
2	該当する場合は、サーバーをラックに設置する前にオプションのサーバー部品を取り付けます。	■ Sun Server X2-4 サービスマニュアル
3	サーバーをラックに取り付けます。	■ 第 2 章「スライドレールによるサーバーのラックへの取り付け」
4	サーバーにケーブルと電源コードを接続します。	■ 第 3 章「ケーブルと電源コードの接続」
5	Oracle ILOM に接続し、サーバーの主電源を入れます。	■ 第 4 章「Oracle ILOM への接続とサーバーへの主電源の投入」

表 1-1 設置タスクのチェックリスト (続き)

ステップ	タスクの説明	手順については、次を参照してください。
6	<p>サポートされているオペレーティングシステムと使用可能なインストール済みのオペレーティングシステムに関する情報を取得します。</p> <p>該当する場合、インストール済みのオペレーティングシステムのいずれかを構成します。</p> <p>Oracle Solaris</p> <p>Oracle VM</p> <p>該当する場合、次のいずれかのオペレーティングシステムをインストールします。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ Oracle Linux ■ Red Hat Enterprise Linux (RHEL) ■ SUSE Linux Enterprise Server (SLES) ■ Oracle Solaris 10 オペレーティングシステム ■ Oracle Solaris 11 オペレーティングシステム ■ Oracle VM ■ Microsoft Windows Server 2008 SP2 オペレーティングシステム ■ Microsoft Windows Server 2008 R2 オペレーティングシステム 	<ul style="list-style-type: none"> ■ 第 5 章「インストール済みの Oracle Solaris OS または Oracle VM ソフトウェアの構成」 ■ 第 5 章「インストール済みの Oracle Solaris OS または Oracle VM ソフトウェアの構成」 ■ Sun Server X2-4 Linux オペレーティングシステムインストールガイド ■ Sun Server X2-4 Oracle Solaris オペレーティングシステムインストールガイド ■ Sun Server X2-4 Oracle VM インストールガイド ■ Sun Server X2-4 Windows オペレーティングシステムインストールガイド

梱包を開く

慎重に発送箱を開けます。すべてのサーバーコンポーネントを開梱します。

サーバーの梱包内容

Sun Server X2-4 には、次の項目が同梱されています。

- Sun Server X2-4
- 電源コード (カントリーキットに別途パッケージ化)
- (オプション) ラックレールと設置指示書を含むラックマウントキット

オプション

電源ケーブルは、ほかのアイテムとは別にパッケージ化されています。

必要なサーバー部品とほとんどのオプションは出荷時に取り付けられています。ただし、一部の注文オプションは別にパッケージ化される場合があります。可能な場合は、サーバーをラックに設置する前にオプションのコンポーネントを取り付けます。サーバーオプションの取り付け手順については、『Sun Server X2-4 サービスマニュアル』を参照してください。

静電気放電に関する注意事項

電子機器は、静電気により損傷する可能性があります。サーバーの設置またはサービス時は、接地された静電気防止リストストラップ、フットストラップ、または同様の安全器具を使用して、静電気による損傷 (ESD) を防止します。



注意 - 電子部品が静電気によって損傷すると、システムが永久に使用できなくなるか、公認の保守技術者による修復が必要になることがあります。電子部品を静電気による損傷から保護するため、静電気防止用マット、静電気防止袋、使い捨て静電気防止用マットなどの静電気防止面に部品を置いてください。システム部品で作業するときは、シャーシの金属面に接続された静電気防止アースストラップを着用します。

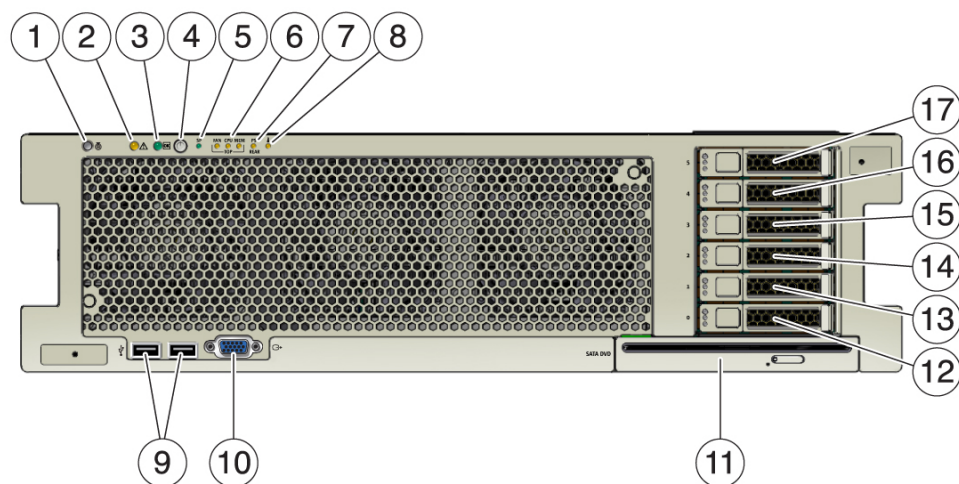
サーバーの説明

このセクションでは、Sun Server X2-4 の前面と背面を示します。

フロントパネルの機能

図 1-1 では、Sun Server X2-4 のフロントパネルを示し、その部品について説明します。

図 1-1 Sun Server X2-4 のフロントパネル



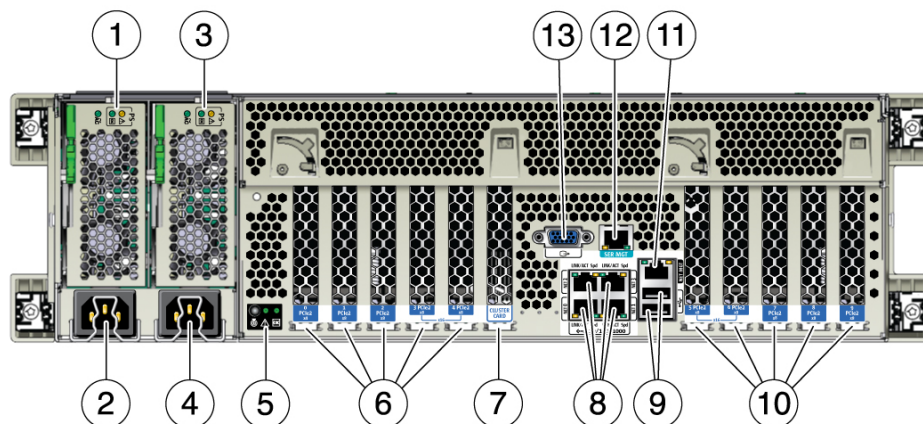
図の説明

- 1: ロケータ LED/ロケータボタン: 白色
- 2: 保守要求 LED: オレンジ色
- 3: 主電源/OK LED: 緑色
- 4: 電源ボタン
- 5: SP OK/障害 LED: 緑色/オレンジ色
- 6: ファンモジュール (FAN)、プロセッサ (CPU)、およびメモリの保守要求 LED (3): オレンジ色
- 7: 電源装置 (PS) の障害 (保守要求) LED: オレンジ色
- 8: 過熱警告 LED: オレンジ色
- 9: USB 2.0 コネクタ (2)
- 10: DB-15 ビデオコネクタ
- 11: SATA DVD ドライブ (オプション)
- 12: ハードディスクドライブ 0 (オプション)
- 13: ハードディスクドライブ 1 (オプション)
- 14: ハードディスクドライブ 2 (オプション)
- 15: ハードディスクドライブ 3 (オプション)
- 16: ハードディスクドライブ 4 (オプション)
- 17: ハードディスクドライブ 5 (オプション)

バックパネルの機能

図 1-2 では、Sun Server X2-4 のバックパネルを示し、その部品について説明します。

図 1-2 Sun Server X2-4 のバックパネル



図の説明

- 1: 電源ユニット 0 のステータスインジケータ LED: 保守要求: オレンジ色 DC OK: 緑色 AC OK: 緑色またはオレンジ色
- 2: 電源ユニット 0 の AC 電源差し込み口
- 3: 電源ユニット 1 のステータスインジケータ LED: 保守要求: オレンジ色 DC OK: 緑色 AC OK: 緑色またはオレンジ色
- 4: 電源ユニット 1 の AC 電源差し込み口
- 5: システムステータス LED: 電源/OK: 緑色 注意: オレンジ色 位置特定: 白色
- 6: PCIe カードスロット 0 - 4
- 7: クラスタカードスロット
- 8: ネットワーク (NET) の 10/100/1000 ポート: NET0 - NET3
- 9: USB 2.0 コネクタ (2)
- 10: PCIe カードスロット 5 - 9
- 11: サービスプロセッサ (SP) のネットワーク管理 (NET MGT) ポート
- 12: シリアル管理 (SER MGT)/RJ-45 シリアルポート
- 13: DB-15 ビデオコネクタ

サーバーがサポートする部品

このセクションでは、Sun Server X2-4 でサポートされる部品について説明します。

Sun Server X2-4 でサポートされる部品と機能

次の表で、Sun Server X2-4 の部品と機能を説明します。

表 1-2 Sun Server X2-4 の部品と機能

部品	Sun Server X2-4
プロセッサ (CPU)	<p>サポートされる構成:</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ ソケット 0 とソケット 2 に取り付けられた 2 つのプロセッサ ■ ソケット 0 から 3 に取り付けられた 4 つのプロセッサ <p>CPU の仕様に関する最新の情報については、Sun x86 サーバーの Web サイトにアクセスし、Sun Server X2-4 のページを参照してください。</p> <p>http://www.oracle.com/technetwork/server-storage/sun-x86/overview/index.html</p>
メモリー	<p>サーバーシャーシには、最大 8 つのメモリーライザーモジュール (各 CPU に対して 2 つのライザー) を搭載できます。各ライザーモジュールには 8 つの PC3L RDIMM を搭載できるため、各プロセッサに最大 16 個の RDIMM を搭載できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 16G バイトの RDIMM が搭載されたライザーモジュールを 4 つ使用している 2 ソケットシステムでは、システムメモリーを最大で 512G バイトにすることができます。 ■ 16G バイトの RDIMM が搭載されたライザーモジュールを 8 つ使用している 4 ソケットシステムでは、システムメモリーを最大で 1024G バイトにすることができます。
ストレージデバイス	<p>内部ストレージの場合、サーバーシャーシに次のハードウェアを搭載できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ フロントパネルから接続できる 2.5 インチドライブベイ (6 個)。各ドライブベイに対してサポートされるドライブインタフェースは、選択されているホストバスアダプタ (Host Bus Adapter, HBA) によって異なります。 ■ サーバーの前面のドライブベイの下に設置される、オプションのスロット搭載の DVD+/-RW ドライブ。この SATA DVD は USB-SATA ブリッジに接続されるため、システムソフトウェアでは USB ストレージデバイスと見なされます。 ■ マザーボード上に内蔵されている高速 USB ポート (1 個)。このポートでは、システムブート用の USB フラッシュデバイスを保持できます。
USB 2.0 ポート	前面に 2 つ、背面に 2 つ、内部に 1 つあります
VGA ポート	<p>前面に 1 つあり、背面には DB-15 高密度ビデオポートが 1 つあります</p> <p>注 - 背面の VGA ポートは、モニター認識用の VESA デバイスデータチャンネルをサポートしています。</p>

表 1-2 Sun Server X2-4 の部品と機能 (続き)

部品	Sun Server X2-4
PCI Express 2.0 I/O スロット	<p>ロープロファイルの PCIe カードを格納するための PCI Express 2.0 スロット (10 個)。すべてのスロットで、x8 PCIe コネクタを使用できます。2 つのスロットでは、x16 PCIe コネクタも使用できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ スロット 0 および 9: x4 電気インタフェース ■ スロット 1、2、4、6、7、および 8: x8 電気インタフェース ■ スロット 3 および 5: x8 または x16 電気インタフェース (x16 コネクタ) <p>注 - PCI Express スロット 3 および 5 は、x16 対応のカードが搭載され、隣のスロット (4 または 6) にカードが搭載されていない場合にのみ、x16 インタフェースとして動作します。</p>
クラスタカードスロット	Sun Storage アプライアンスで使用するための専用の特殊スロット (1 つ)。Sun Server X2-4 では、このスロットに標準の PCIe カードを搭載できません。
PCI Express I/O カード	<p>お客様が注文できる I/O カードの一覧については、Sun x86 サーバーの Web サイトにアクセスし、Sun Server X2-4 サーバーのページを参照してください。</p> <p>http://www.oracle.com/technetwork/server-storage/sun-x86/overview/index.html</p>
Ethernet ポート	<p>背面パネルに 4 つの 10/100/1000 RJ-45 ギガビット Ethernet (GbE) ポート</p> <p>各ネットワークインタフェースコントローラ (Network Interface Controller、NIC) は、Intel QuickData Technology、Intel I/OAT、VMDq、PCI-SIG SR-IOV、IPSec オフロード、および LinkSec をサポートしています。</p>
サービスプロセッサ	<p>業界標準の IPMI 機能セットをサポートする統合 Baseboard Management Controller (BMC)</p> <p>IP を介した KVMs、DVD、フロッピーのリモート制御をサポートします</p> <p>シリアルポートを含む</p> <p>専用の 10/100BaseT 管理ポートおよびオプションでホストの GbE ポート (サイドバンド管理) のいずれかを使用して、SP への Ethernet アクセスをサポートします</p>
電源装置	<p>ホットスワップが可能な電源装置 (2 つ)。どちらも、2000 ワット容量 (200 - 240 ボルト)、自動範囲設定 (auto-ranging)、軽負荷効率モード (light load efficiency mode)、冗長オーバーサブスクリプション (redundant over-subscription) を備えています</p>
冷却ファン	<p>シャーシの前面 (最上部) のホットスワップが可能な冗長ファン (6 つ)。冗長ファンは、各電源装置に搭載されています</p>
管理ソフトウェア	Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM)

サーバーの仕様

物理仕様

表 1-3 に、Sun Server X2-4 の物理仕様の一覧を示します。

表 1-3 サーバーの物理仕様

パラメータ	Sun Server X2-4
高さ	5.1 インチ (129.85 mm)
幅	17.2 インチ (436.5 mm)
奥行	28.8 インチ (732 mm)
重量	85 ポンド (38.5 kg)

電氣的仕様

表 1-4 に、Sun Server X2-4 の電氣仕様の一覧を示します。

注 - 電力消費に関する最新情報については、Sun x86 サーバーの Web サイトにアクセスし、Sun Server X2-4 のページを参照してください (<http://www.oracle.com/technetwork/server-storage/sun-x86/overview/index.html>)。

表 1-4 サーバーの電氣仕様

パラメータ	値
入力	
周波数	50/60 Hz
AC 動作電圧範囲	100-127 VAC (2 つの CPU の場合) 200-240 VAC (2 または 4 つの CPU の場合)
最大電流 AC RMS	12A @ 100 VAC、12A @ 200 VAC
電力消費	
最大電力消費	1800 W
最大出熱	6143 BTU/時
定格電圧、電流	1837 VA @ 240 VAC、0.98 P.F.

環境要件

表 1-5 に、Sun Server X2-4 の環境要件の一覧を示します。

表 1-5 サーバーの環境要件

パラメータ	値
動作温度 (単一のラック以外のシステム)	5°C - 35°C (41°F - 95°F)
非動作時温度 (単一のラック以外のシステム)	-40°C - 70°C (-40°F - 158°F)
動作湿度 (単一のラック以外のシステム)	10 - 90% の相対湿度、結露なし
非動作時湿度 (単一のラック以外のシステム)	最大 93% の相対湿度、結露なし
動作高度 (単一のラック以外のシステム)	最大 3048 m、最大周囲温度は 900 m を超えると 300 m ごとに摂氏 1 度ずつ下がる
非動作時高度 (単一のラック以外のシステム)	最大 12,000 m
音響ノイズ	8.9 B (アイドルおよび動作時)、75 dBA (バイスタンダ位置)

サーバーの管理

設置したサーバーの管理については、状況に応じていくつかの異なるオプションがあります。

■ 多数のサーバーの管理

さまざまなシステム管理ツールを使用してサーバーを管理できます。システム管理ツールの詳細は、次にある情報を参照してください。<http://www.oracle.com/goto/system-management>

これらのツールのいくつかのサマリーと概要を次に示します。

- 使用しているサーバーが多数の x86 および SPARC サーバーのうちの 1 つであり、単一のインタフェースから管理する場合は、Oracle Enterprise Manager Ops Center を使用できます。詳細は、<http://www.oracle.com/us/products/enterprise-manager/044497.html> を参照してください。
- エンタープライズサーバーを監視する場合は、Sun Management Center を利用できます。詳細は、<http://www.oracle.com/technetwork/systems/patches/sysmgmt/smc-jsp-138444.html> を参照してください。

- すでにサードパーティーのシステム管理ツールがある場合は、サーバーを多数のサードパーティーツールに組み込むことができます。詳細は、<http://www.oracle.com/goto/system-management> を参照してください。
- 単一のサーバーの管理
 - Oracle Hardware Installation Assistant は、サーバーの初期構成に使用できるアプリケーションです。このアプリケーションを使用すると、ファームウェア (Oracle ILOM ファームウェア、BIOS、および RAID コントローラソフトウェア) を更新したり、Linux または Windows オペレーティングシステムのインストールを自動化したりすることができます。詳細は、次にある『Oracle Hardware Installation Assistant 2.5 ユーザーズガイド x86 サーバー版』を参照してください。 <http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=hia>
 - Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) は、サーバーのステータスと構成の監視に使用できる組み込みソフトウェアおよびハードウェアです。詳細は、次にある Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.1 ドキュメントライブラリを参照してください (Sun Server X2-4 ソフトウェアリリース 1.3 以降の場合)。 <http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=ilom31>
Sun Server X2-4 ソフトウェアリリース 1.0 - 1.2 の場合は、次にある Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 ドキュメントライブラリを参照してください。 <http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=ilom30>

スライドレールによるサーバーのラックへの取り付け

この章では、ラックマウントキットのレール構成部品を使用して、サーバーをラック内に取り付ける方法について説明します。レール構成部品を購入した場合は、この手順を実行します。

この章は、次の項目で構成されています。

- 23 ページの「始める前に」
- 24 ページの「ラックの互換性」
- 26 ページの「スライドレールの分解」
- 27 ページの「サーバーへの取り付けブラケットの取り付け」
- 29 ページの「ラックへのスライドレール構成部品の取り付け」
- 33 ページの「スライドレール構成部品へのサーバーの取り付け」
- 35 ページの「ケーブル管理アームの取り付け」
- 40 ページの「スライドレールと CMA の動作の確認」

注-このガイドでは、用語「ラック」とはオープンラックまたはクローズキャビネットを意味します。

始める前に

サーバーのラック内への取り付けを開始する前に、次の概要を読み、サーバーの上部カバーのサービスラベルを確認してください。

サーバー設置プロセスの概要

オプションのスライドレールとケーブル管理アームを使用してサーバーを 4 ポストラック内に取り付けるには、次に示す順序でタスクを実行します。

- 1. 24 ページの「ラックの互換性」
- 2. 26 ページの「スライドレールの分解」
- 3. 27 ページの「サーバーへの取り付けブラケットの取り付け」
- 4. 35 ページの「ケーブル管理アームの取り付け」
- 5. 40 ページの「スライドレールと CMA の動作の確認」
- 6. 41 ページの「バックパネルのコネクタとポート」

ラックの互換性

使用するラックがオプションのスライドレールおよびケーブル管理アーム (CMA) と互換性があることを確認します。オプションのスライドレールは、次の仕様を満たすさまざまな標準ラックに対応しています。

表 2-1 ラックの互換性

項目	要件
構造	前後左右で固定する形式の 4 ポストラック。2 ポストラックは互換性がありません。
ラック水平方向の開口部とユニットの縦方向のピッチ	ANSI/EIA 310-D-1992 または IEC 60927 規格に適合すること。M6 または 9.5 平方ミリメートルのネジ穴だけがサポートされています。
前側取り付け面と後ろ側取り付け面の距離	610 から 915 mm (24 から 36 インチ)。
前側取り付け面の前面の隙間	キャビネット前面ドアまでの距離が 25.4 mm (1 インチ) 以上あること。
前側取り付け面の背後の隙間	ケーブル管理アームを使用する場合は、キャビネット後面ドアまで 900 mm (35.5 インチ) 以上の間隔があり、ケーブル管理アームを使用しない場合は 770 mm (30.4 インチ) 以上あります。
前側取り付け面と後ろ側取り付け面の幅	構造的支柱とケーブルの溝の距離が 456 mm (18 インチ) 以上であります。
サーバーの寸法	奥行き: (PSU ハンドルを含まない長さ): 732 mm (28.82 インチ) 幅: (耳を含まない長さ): 436.5 mm (17.19 インチ) 高さ: 129.85 mm (5.11 インチ)



注意-装置の搭載: 上方が重くなり転倒することがないように、装置は必ずラックの最下段から上へ順次搭載してください。転倒防止機構を装備しているラックであれば、サーバー取り付け時に活用してください。



注意-動作時周辺温度の上昇: 密閉されたラックアセンブリまたはマルチユニットのラックアセンブリにサーバーを設置している場合、ラック環境の動作時周辺温度が室内の周辺温度より高くなる場合があります。したがって、サーバーに対して指定されている最大周辺温度 (Tma) に適した環境に装置を設置することを検討するようにしてください。サーバーの環境要件については、20 ページの「環境要件」を参照してください。



注意-通気の減少: 装置をラック内に取り付ける際に、装置の安全な動作に必要な通気が妨げられないようにしてください。



注意-装置の配置: 不均等な装置の配置によって危険な状態が発生しないよう、装置をラック内に取り付けるようにしてください。



注意-回路の過負荷: 電源回路への装置の接続、および回路の過負荷によって発生する可能性のある過電流対策や電源配線についても考慮するようにしてください。これについて対処するときは、装置のネームプレートに表示された定格電力に従った配慮が必要です。



注意-確実なアース: ラックマウント型装置にアースを確実に取り付けてください。分岐回路への直接接続以外の電源接続 (テーブルタップの使用など) の場合は、特に注意を払うようにしてください。



注意-スライドレールに搭載した機器を棚または作業スペースとして使用しないでください。

スライドレールの分解

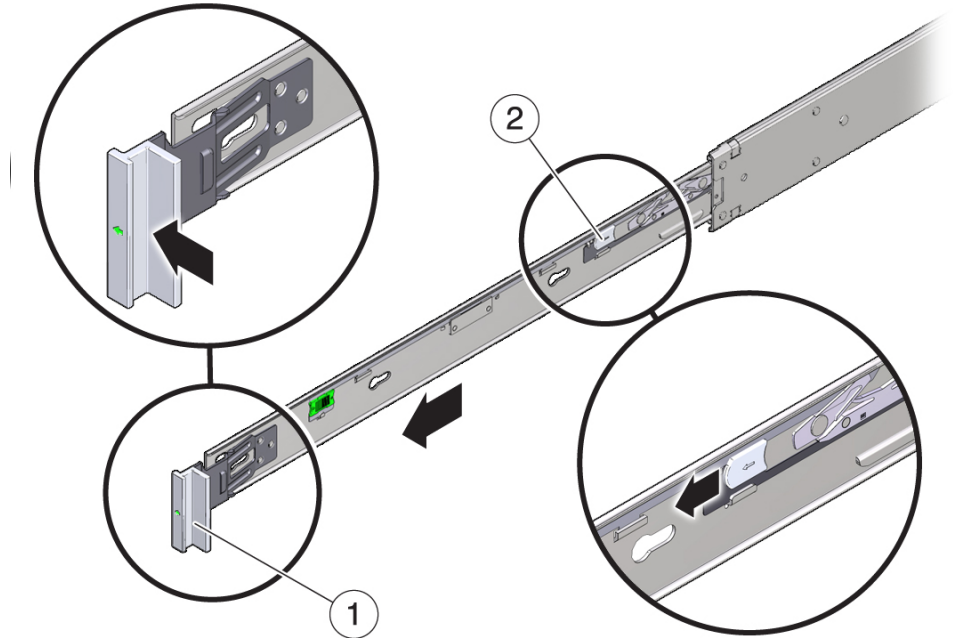
取り付け前にスライドレールを分解するには、次の手順を実行します。

▼ スライドレールの分解

スライドレール構成部品から構成部品を取り外すには:

- 1 スライドレールを開梱します。
- 2 スライドレール構成部品の前面にあるスライドレールロックを特定します (図 2-1)。
- 3 矢印の方向にスライドレールロックを押しながら、固定部品がストップに達するまでスライドレールから引き出します (図 2-1)。
- 4 取り付けブラケットリリースボタンを取り付けブラケットの前側に押しながら (図 2-1)、取り付けブラケットをスライドレール構成部品から外します。
- 5 すべてのスライドレール構成部品で上記の手順を繰り返します。

図2-1 取り付け前のスライドレールの分解



図の説明

- 1: スライドレールロック
- 2: 固定部品リリースボタン

サーバーへの取り付けブラケットの取り付け

サーバーをラックに搭載する前に、固定部品をサーバーに取り付ける必要があります。

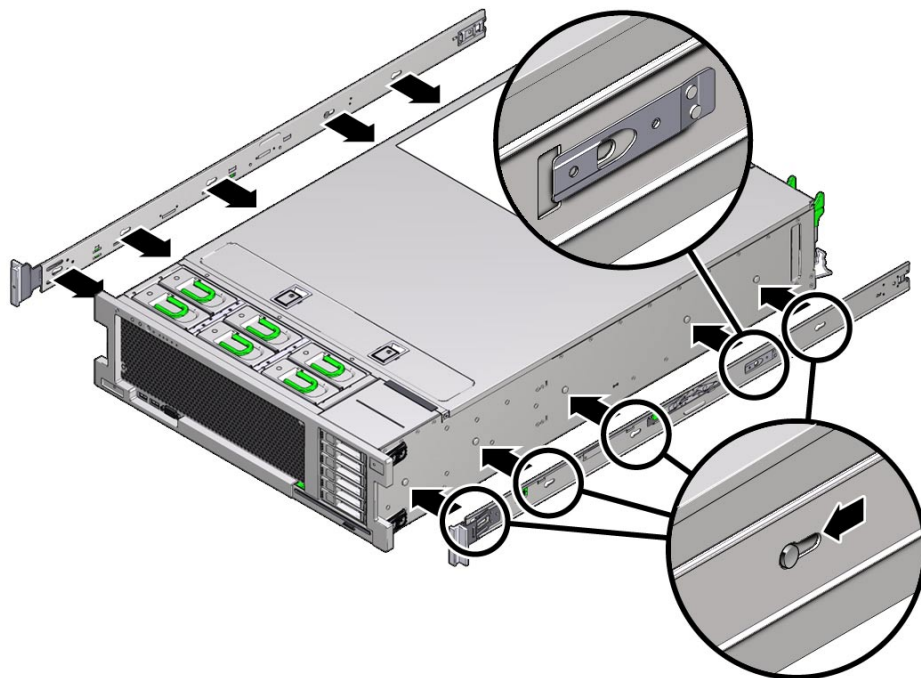
▼ 固定部品の取り付け

固定部品をサーバーの側面に取り付けるには:

- 1 スライドレールロックがサーバーの前面に来て、固定部品の5つの鍵穴の開口部がシャーシの側面にある5つの位置決め用ピンとちょうど合うように、シャーシに対して固定部品を位置合わせします (図2-2)。

注- 固定部品はすべて同一で、シャーシのどちら側にも取り付けることができます。

図2-2 固定部品とサーバーシャーシの位置合わせ



- 2 5つのシャーシ位置決め用ピンの頭を固定部品の5つの鍵穴の開口部に挿入し、固定部品を、クリップが「カチッ」と音がして固定されるまで、シャーシの前面に向けて引っ張ります(図2-2)。
- 3 背面の位置決め用ピンが固定部品のクリップにかみ合っていることを確認します。
- 4 手順1から手順3を繰り返して、サーバーの反対側の側面に残りの固定部品を取り付けます。

ラックへのスライドレール構成部品の取り付け

次の手順を実行して、スライドレール構成部品のラックに取り付けます。

注-スライドレール構成部品では、9.5 mm の四角穴およびM6 丸穴のラックのみをサポートしています。7.2 mm、M5、10 - 32 の取り付け穴など、その他のすべてのラックはサポートされていません。レール穴のサイズについては、ラックのドキュメントを参照してください。

▼ スライドレール構成部品の取り付け

スライドレール構成部品のラックに取り付けるには:

- 1 (オプション)サーバーが設置されているラックを移動する必要がある場合は、取り付けネジとケージナットを使用してスライドレール構成部品を取り付けることをお勧めします。

手順2を実行する前に、ケージナットを差し込んでおきます。これらのケージナットの実付け手順については、「レールラックマウントキットの概要と情報」カードを参照してください。このカードはレールキットに含まれています。

- 2 スライドレール構成部品の前面の固定部品が前面のラックのポストの外側に来るように、また、スライドレール構成部品の背面の固定部品が背面のラックのポストの内側に来るように、ラック内でスライドレール構成部品を位置決めします (図 2-5)。
- 3 スライドレール構成部品の取り付けピンと、前面と背面のラックのポストの取り付け穴の位置を合わせます。次に、取り付けピン (mounting pin) がラックにかみ合うまで構成部品をラックの背面の方向に押し込んで、構成部品を固定します (図 2-3 および図 2-4)。

取り付けピンとラックがかみ合うと、カチッという音がします。

注-スライド構成部品の取り付けピンは、9.5 mm 四角穴とM6 丸型取り付け穴でのみ使用できます。それ以外のサイズの取り付け穴はサポートされません。

図2-3 ラックへのスライドレール構成部品の取り付け

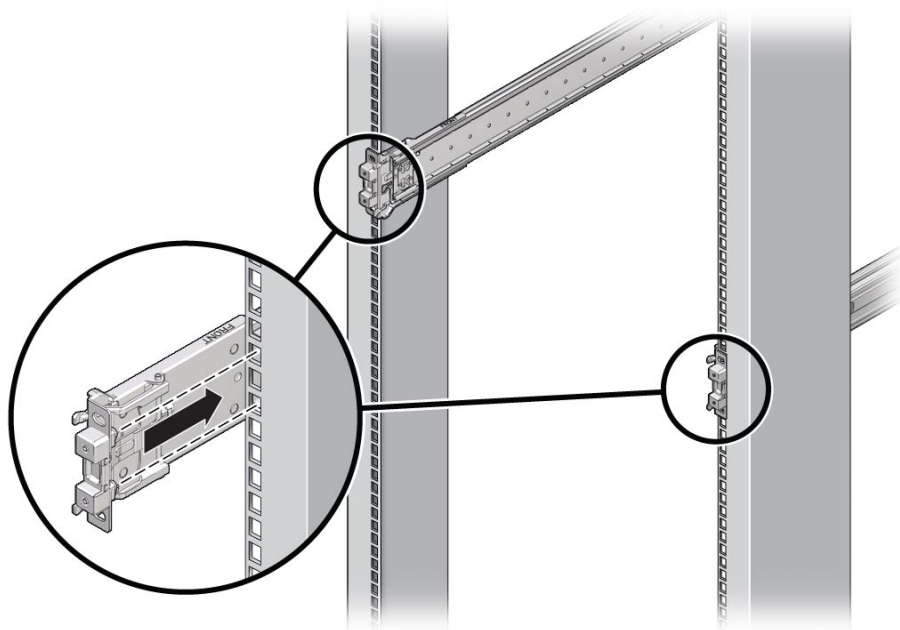
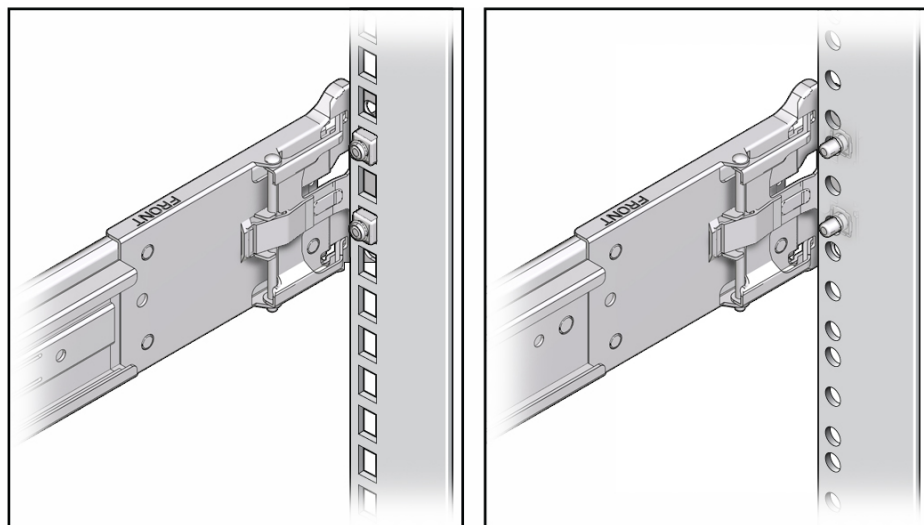
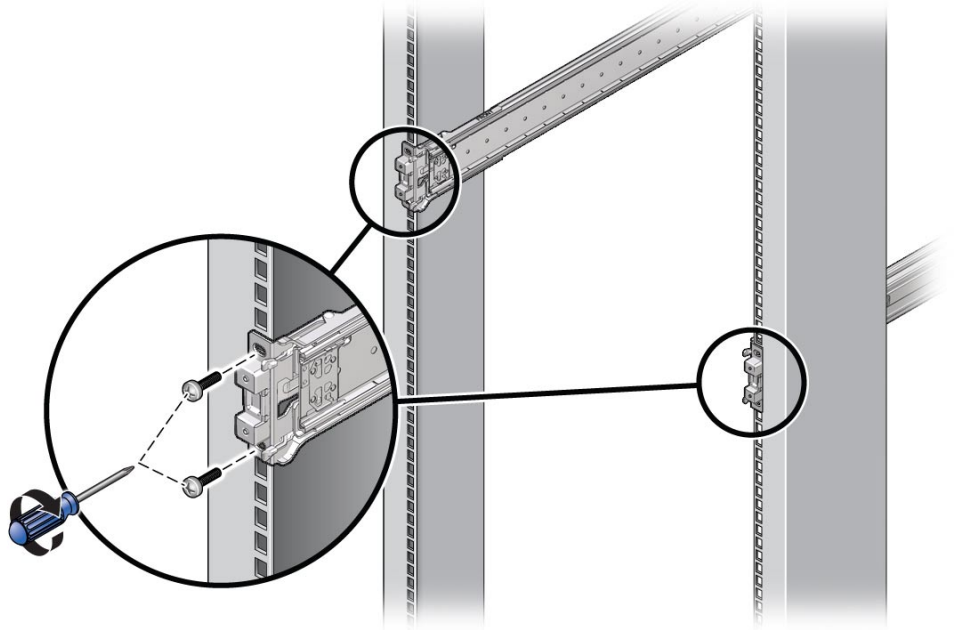


図2-4 スライドレール取り付けピン



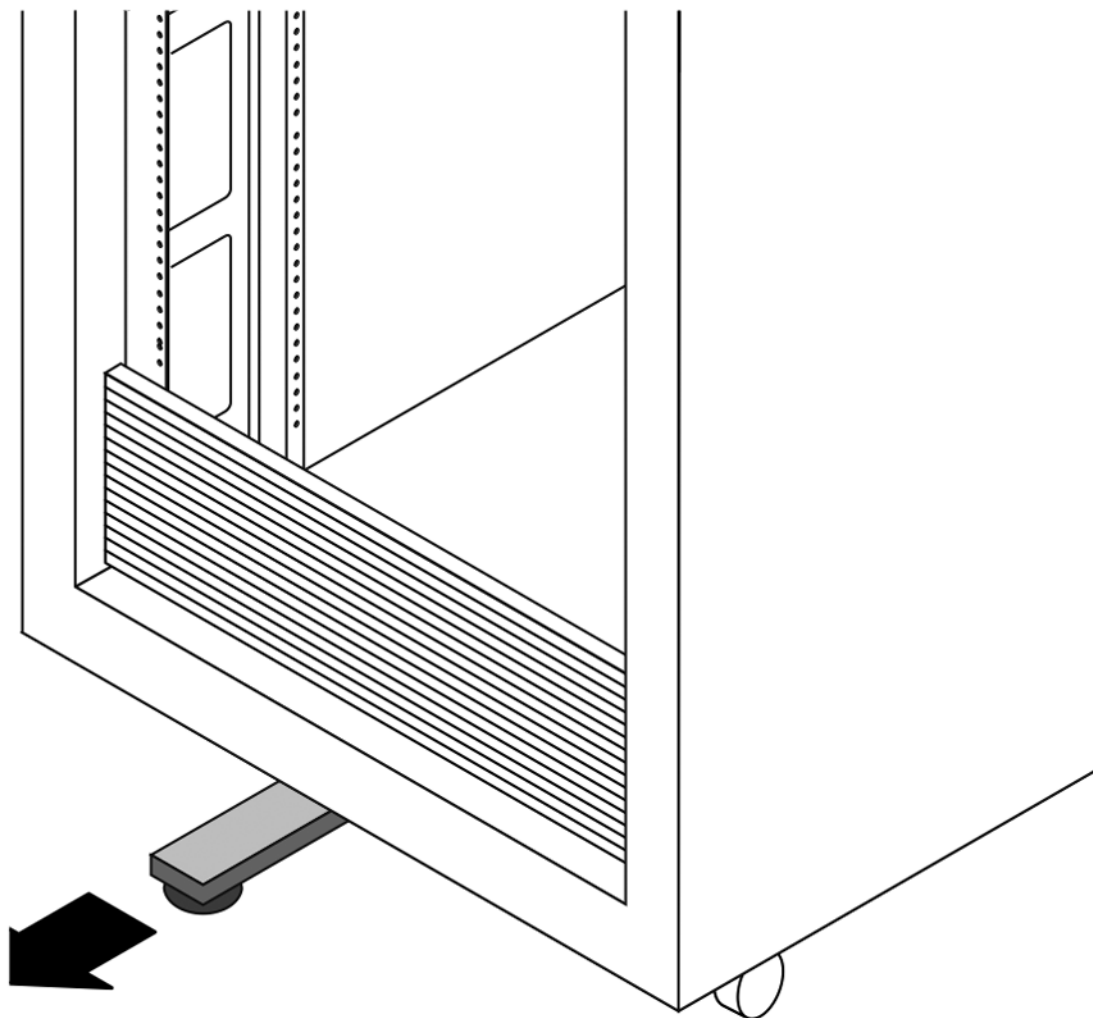
- 4 (オプション) 取り付けネジとケージナットを使用してスライドレール構成部品を取り付けるように選択した場合、前面と背面の両方のスライドレール固定部品とラックのポストの穴に M6 取り付けネジを通し、ケージナットで締め付けます (図 2-5)。

図2-5 ラックへのスライドレール構成部品の取り付け



- 5 手順2 から 手順4 を繰り返して、残りのスライドレール構成部品を取り付けます。
- 6 利用可能な場合は、ラックの下部の転倒防止バーを伸ばします (図 2-6)。手順については、ラックのドキュメントを参照してください。

図2-6 転倒防止用バーの引き出し



注意- ラックに転倒防止用のバーがない場合、ラックが転倒する可能性があります。

スライドレール構成部品へのサーバーの取り付け

この手順では、固定部品を取り付けたサーバーシャーシを、ラックに取り付けられているスライドレールアセンブリに装着します。



注意-サーバーは重いので、この手順では少なくとも2名の作業者がが必要です。この手順を1人で行おうとすると、装置の破損または人体の損傷を招く可能性があります。



注意-上方が重くなり転倒することがないように、装置は必ずラックの最下段から上へ順次搭載してください。転倒防止用のバーを伸ばして、機器の設置中にラックが転倒しないようにしてください。

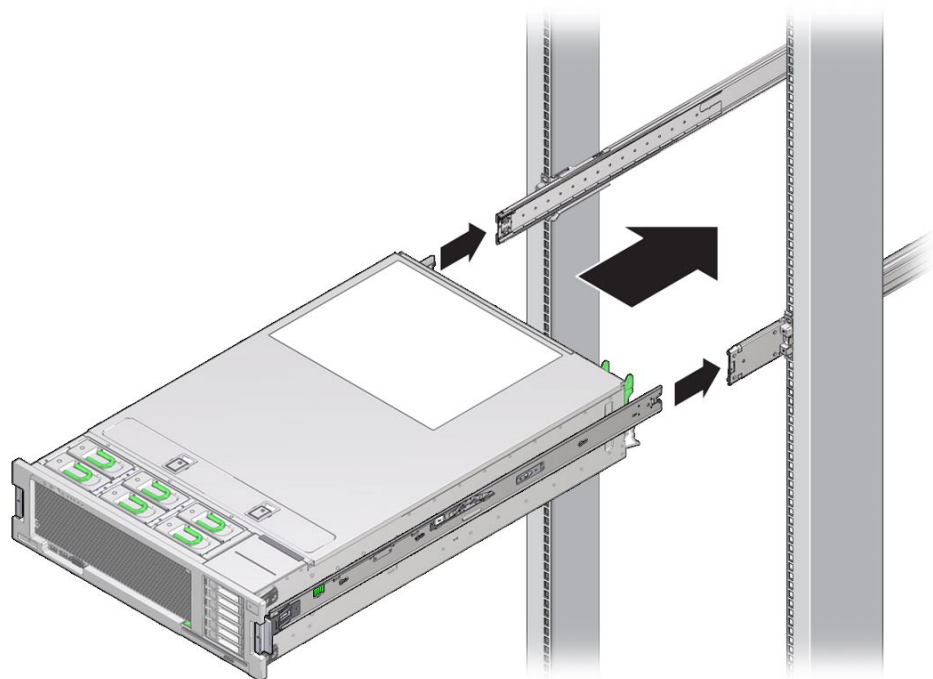
▼ スライドレール構成部品へのサーバーの取り付け

- 1 スライドレールをラックのスライドレール構成部品に可能なかぎり奥まで押し込みます。
- 2 固定部品の後端が、ラックに取り付けられているスライドレール構成部品と整列するようにサーバーを持ち上げます (図 2-7)。
- 3 取り付けブラケットをスライドレールに挿入し、取り付けブラケットがスライドレールのストップに接触するまでサーバーをラック内に押し込みます (約 30 cm (12 インチ))。



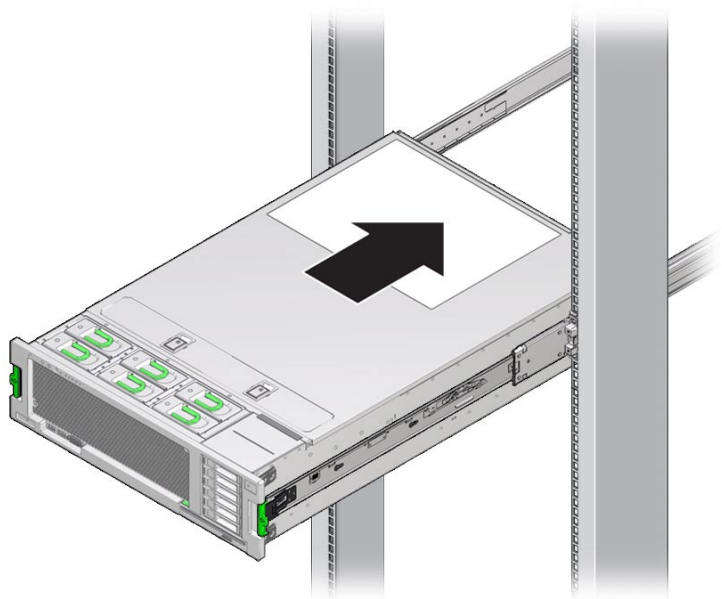
注意-サーバーをスライドレールに挿入するとき、固定部品の上下の取り付けリップ (mounting lip) がスライドレールに挿入されていることを確認します。サーバーが正しく取り付けられている場合は、サーバーを前後に簡単にスライドできます。サーバーを簡単にスライドできない場合は、各取り付けリップが正しく挿入されていることを確認してください。固定部品が正しく挿入されていないと、サーバーをラックから取り外すときに落としてしまう可能性があります。

図2-7 固定部品を取り付けたサーバーのスライドレールへの挿入



- 4 両方の固定部品の緑色のスライドレールリリースボタン (図2-1) を同時に押しながら、サーバーをラック内に押し込みます (図2-8)。固定部品の前面のスライドレールロックがスライドレール構成部品にかみ合うまで押し込みます。
かみ合うと、「カチッ」と音がします。

図2-8 ラックへのサーバーのスライド



注意-サーバーがラックにしっかりと取り付けられていること、およびスライドレールロックが固定部品にかみ合っていることを確認してから次の手順に進みます。

ケーブル管理アームの取り付け

ケーブル管理アーム (CMA) はオプションの構成部品であり、ラック内のサーバーケーブルの配線に使用できます。

▼ ケーブル管理アームの取り付け

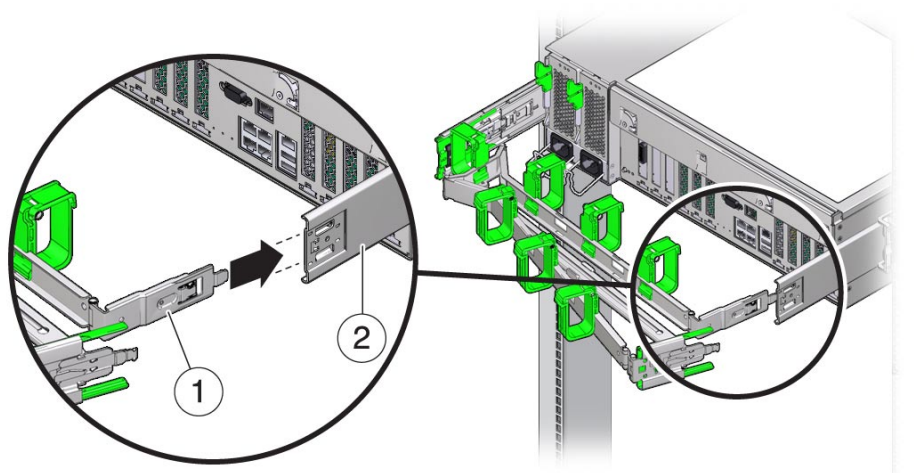
オプションの CMA を取り付けるには、この手順を使用します。

- 1 CMA の部品を開梱します。
- 2 CMA を機器ラックの背面に移動し、サーバーの背後に十分な作業スペースがあることを確認します。

注- この手順の「左」と「右」は、装置ラックの背面から見たときの左と右を示します。

- 3 テープを剥がして **CMA** の部品を分けます。
- 4 **CMA** の固定部品コネクタを、「カチッ」と音がして固定されるまで、右側のスライドレールに差し込みます (図 2-9)。

図 2-9 右側スライドレール後部への CMA 取り付けブラケットの挿入

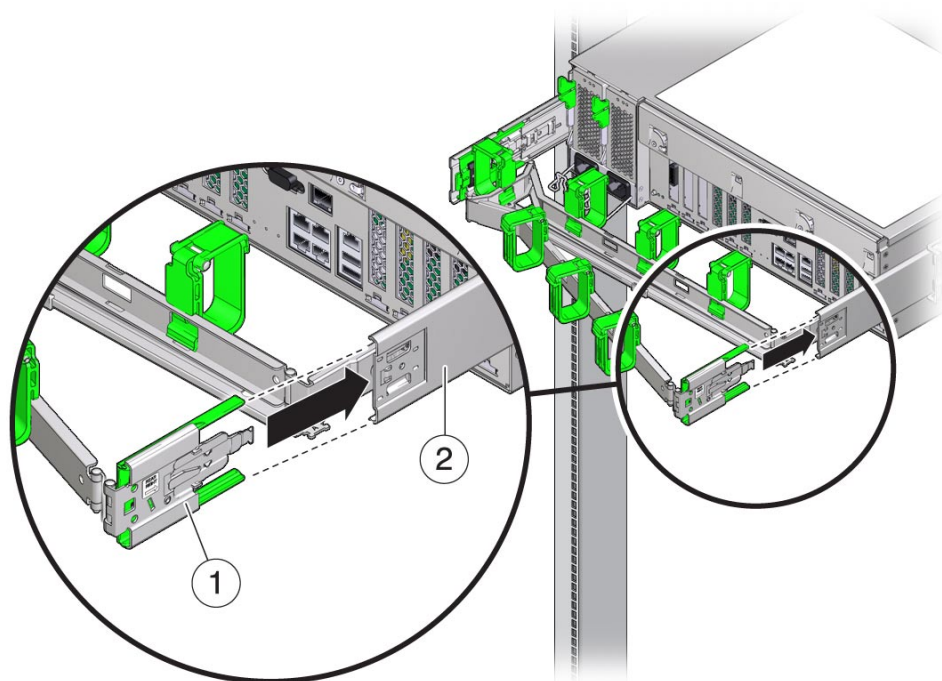


図の説明

- 1: CMA 固定部品
- 2: 右側スライドレール

- 5 右側の **CMA** スライドレールコネクタを、「カチッ」と音がして固定されるまで、右側のスライドレール構成部品に差し込みます (図 2-10)。

図 2-10 右側スライドレール後部への CMA スライドレールコネクタの挿入

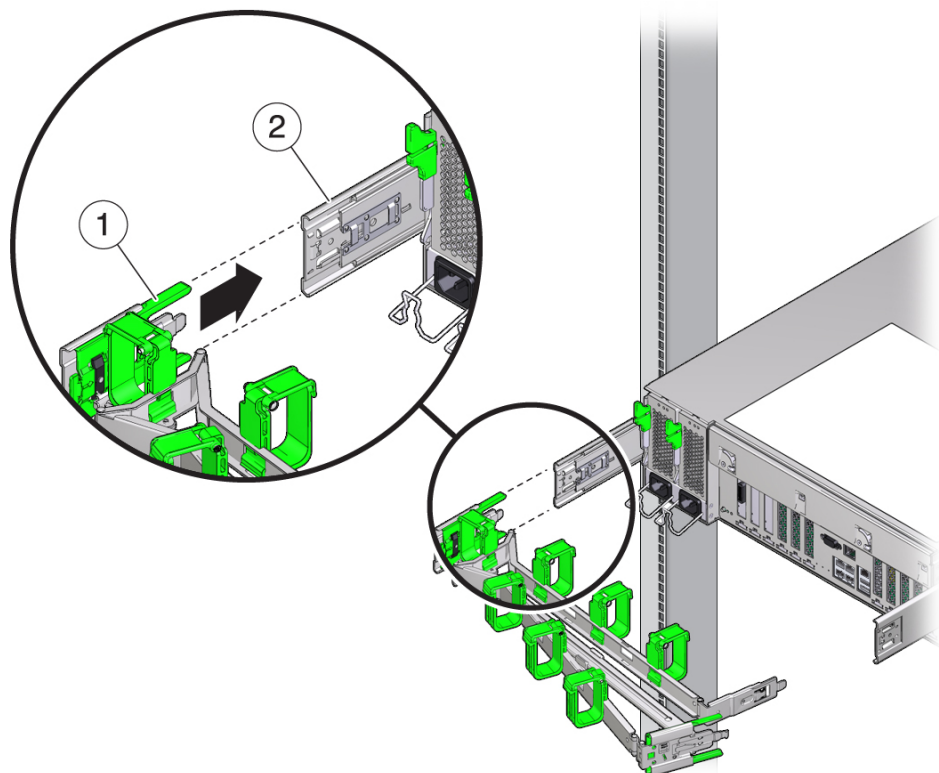


図の説明

- 1: CMA スライドレールコネクタ
- 2: 右側スライドレール

- 6 左側の CMA スライドレールコネクタを、「カチッ」と音がして固定されるまで、左側のスライドレール構成部品に差し込みます (図 2-11)。

図 2-11 左側スライドレール後部への CMA スライドレールコネクタの挿入



図の説明

- 1: CMA スライドレールコネクタ
- 2: 左側スライドレール

- 7 必要に応じて、サーバーまでケーブルを配線して取り付けます。

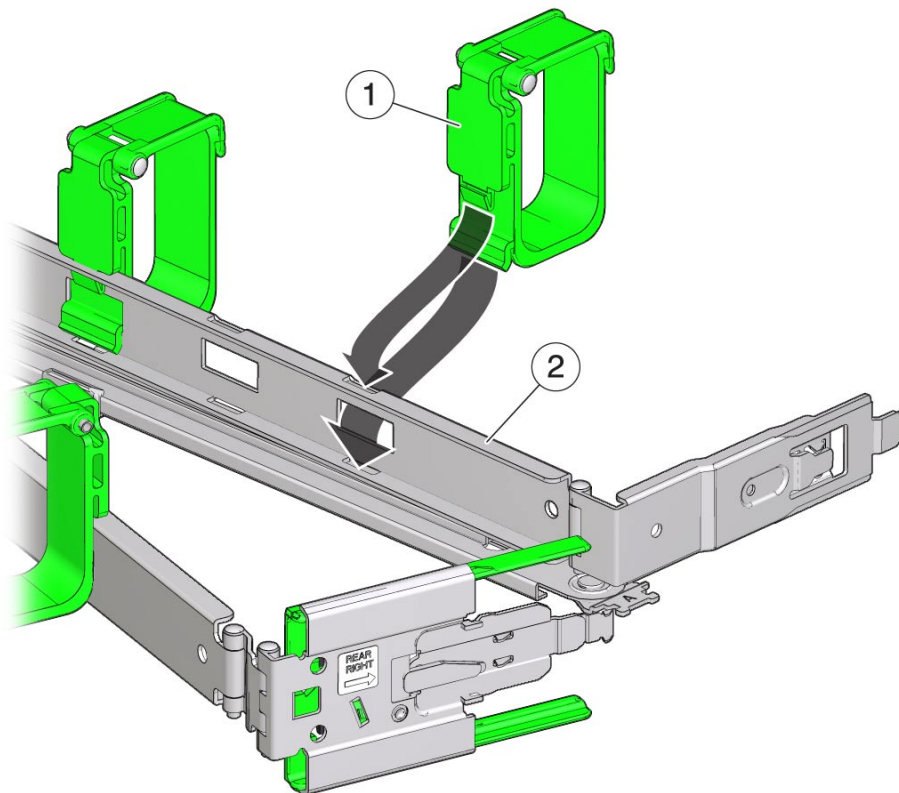
注-サーバーケーブルの取り付け手順については、[41 ページの「バックパネルのコネクタとポート」](#)を参照してください。

- 8 必要に応じて、ケーブルフックとループストラップを **CMA** に取り付け、所定の位置に押し込んでケーブルを固定します (図 2-12)。

注-ケーブルフックとループストラップは、CMA にあらかじめ取り付けられています。ケーブルフックとループストラップを CMA に取り付け直す必要がある場合は、この手順を実行してください。

最善の結果を得るには、3つのケーブルストラップをCMAの背面側に等間隔に配置し、3つのケーブルストラップをサーバーにもっとも近いCMAの側面に配置します。

図2-12 CMA ケーブルストラップの取り付け



図の説明

- 1: CMA ケーブルストラップ
- 2: CMA アーム

スライドレールとCMAの動作の確認

スライドレールとCMAが正しく動作していることを確認するには、次の手順に従います。

▼ スライドレールとCMAの動作の確認

注- この手順は、2人の作業員で実行することをお勧めします。1人がサーバーをラックの前後に動かし、もう1人がケーブルとCMAを監視します。

- 1 スライドレールがストップに達するまで、ラックからサーバーをゆっくりと引き出します。
- 2 接続されたケーブルが巻き付いたりねじれたりしていないかを確認します。
- 3 CMAがスライドレールからいっぱいまで伸びることを確認します。
- 4 次の手順に従って、サーバーをラック内に押し戻します。
サーバーを完全に引き出したときに、サーバーをラックに戻すために2対のスライドレールストップを解放する必要があります。
 - a. 最初の対のストップは各スライドレールの内側(サーバーのバックパネルのすぐ後ろ)にあるレバーです。両方の緑色のレバーを同時に押し、サーバーをラックに向かってスライドさせます。
サーバーは約46 cm (18 インチ) スライドして停止します。
続ける前に、ケーブルとCMAが引っかからずに格納されることを確認します。
 - b. 2番目の対のストップは、各固定部品の前面近くにあるスライドレールリリースボタンです(図 2-1)。両方の緑色のスライドレールリリースボタンを同時に押して、両方のスライドレールロックがかみ合うまでサーバーを完全にラック内に押し込みます。
- 5 必要に応じて、ケーブルストラップとCMAを調整します。

ケーブルと電源コードの接続

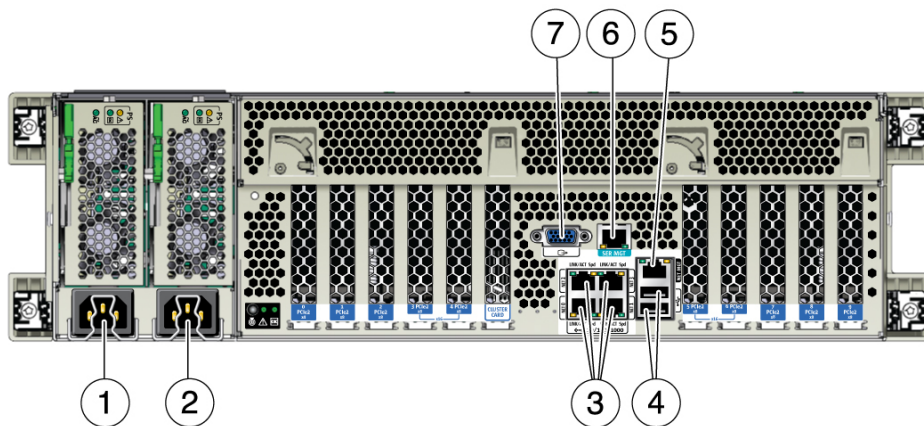
この章では、サーバーにケーブルを接続し、はじめて電源を投入する方法について説明します。ここでは、次のトピックについて説明します。

- 41 ページの「バックパネルのコネクタとポート」
- 42 ページの「サーバーへのケーブルの接続」
- 43 ページの「サーバーへの電源コードの接続」

バックパネルのコネクタとポート

図 3-1 に、サーバーのバックパネルのコネクタおよびポートの位置と説明を示します。

図 3-1 バックパネルのコネクタとポート



図の説明

- 1: 電源ユニット 0 の AC 電源差し込み口
- 2: 電源ユニット 1 の AC 電源差し込み口
- 3: ネットワーク (NET) の 10/100/1000 ポート: NET0 - NET3
- 4: USB 2.0 コネクタ (2)
- 5: サービスプロセッサ (SP) のネットワーク管理 (NET MGT) Ethernet ポート
- 6: シリアル管理 (SER MGT)/RJ-45 シリアルポート
- 7: DB-15 ビデオコネクタ

サーバーへのケーブルの接続

次の手順に従って、ケーブルをサーバーに接続します。

▼ サーバーのケーブル接続

次の順序で、外部ケーブルをサーバーに接続します。[図 3-1](#)を参照してください。

- 1 必要に応じて、**Ethernet** ケーブルをギガビット **Ethernet (NET)** コネクタに接続します [3]。
- 2 (オプション)システムコンソールで直接対話する場合は、マウスやキーボードなどの外部デバイスをサーバーの **USB** コネクタ [4] に、モニターを **DB-15** ビデオコネクタ [7] に接続します。
- 3 ネットワーク経由で **Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM)** ソフトウェアに接続する場合は、**Ethernet** ケーブルを **NET MGT** とラベル付けされた **Ethernet** ポート [5] に接続します。

注- サービスプロセッサ (SP) は、デフォルトで **NET MGT** (帯域外) ポートを使用します。代わりに、SP がサーバーの 4 つの 10/100/1000 Ethernet ポートのいずれかを使用するように構成できます。SP は構成済みの Ethernet ポートのみを使用します。

- 4 シリアル管理ポートを使用して **Oracle ILOM** コマンド行インタフェース (**CLI**) にアクセスする場合は、シリアルヌルモデムケーブルを **SER MGT** とラベル付けされた **RJ-45** シリアルポート [6] に接続します。
シリアルコンソールからのシステム出力の確認方法については、[46 ページ](#)の「ローカルのシリアル接続を使用した **Oracle ILOM** へのログイン」を参照してください。

サーバーへの電源コードの接続

次の手順に従って、電源コードをサーバーに接続します。電源コードが接続されると、サーバーはスタンバイ電源モードに入ります。

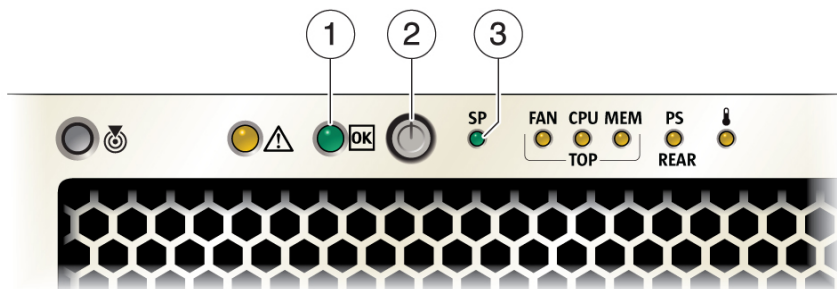
注-デフォルトでは、低電圧線 (100 - 127 ボルト) の AC 電源で動作するのは 2 CPU システムのみです。4 CPU システムの主電源をオンにするには、システムに高電圧線 (200 - 240 ボルト) の AC 電源が必要です。

▼ 電源コードの接続

- 1 アースされた 2 本のサーバー電源コードをアースされたコンセントに接続します。
- 2 2 本のサーバー電源コードをサーバーのバックパネルの AC コネクタに接続します (図 3-1 [1、2])。

電源が接続されると、サーバーはブートしてスタンバイ電源モードに入ります。Oracle ILOM が起動するときに SP OK/障害 LED が点滅し、Oracle ILOM のシステムログインの準備ができるまで、主電源/OK LED は点灯しません (図 3-2)。数分後、主電源/OK LED がスタンバイパターンでゆっくりと点滅し、サービスプロセッサ (SP) が使用できる状態になったことを示します。サーバーはまだ初期化されていませんし、電源も入っていません。

図 3-2 フロントパネルのインジケータと電源ボタン



図の説明

- 1: 主電源/OK LED
- 2: 電源ボタン
- 3: SP OK/障害 LED

Oracle ILOM への接続とサーバーへの主電源の投入

この章では、Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) のコマンド行インタフェース (CLI)、または Web ブラウザユーザーインタフェース (BUI) にアクセスして、サーバーを管理する方法について説明します。サーバーの主電源を入れる方法についても説明します。

この章は、次のセクションで構成されています。

- 45 ページの「Oracle ILOM への接続」
- 56 ページの「サーバーへの主電源の投入」

Oracle ILOM を使用する手順の詳細については、次を参照してください。

- Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.1 ドキュメントライブラリ (Sun Server X2-4 ソフトウェアリリース 1.3 以降の場合): <http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=ilom31>
- Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 ドキュメントライブラリ (Sun Server X2-4 ソフトウェアリリース 1.0 - 1.2 の場合): <http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=ilom30>

Oracle ILOM への接続

このセクションでは、Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) を使用して、サーバーの IP アドレスを構成する方法について説明します。次のトピックが含まれます。

- 46 ページの「ネットワークのデフォルト設定」
- 46 ページの「ローカルのシリアル接続を使用した Oracle ILOM へのログイン」
- 47 ページの「リモート Ethernet 接続を使用した Oracle ILOM へのログイン」
- 48 ページの「Oracle ILOM CLI でのネットワーク設定の変更」
- 52 ページの「Oracle ILOM Web インタフェースでのネットワーク設定の変更」
- 54 ページの「Oracle ILOM CLI からの IPv4 または IPv6 ネットワーク構成のテスト」

- 55 ページの「[Oracle ILOM Web インタフェースからの IPv4 または IPv6 ネットワーク構成のテスト](#)」
- 56 ページの「[Oracle ILOM の終了](#)」

ネットワークのデフォルト設定

Sun Server X2-4 は、Oracle ILOM が IPv4 および IPv6 ネットワーク環境で完全に動作することを可能にするデュアルスタック IPv4 および IPv6 設定をサポートしています。IPv4 構成の場合、DHCP がデフォルトで有効になっているので、ネットワーク上の DHCP サーバーがネットワーク設定をサーバーに自動的に割り当てます。IPv6 構成の場合、IPv6 ステートレス自動設定がデフォルトで有効になっているので、ネットワーク上の IPv6 ルーターがネットワーク設定を割り当てます。通常の構成では、DHCP サーバーまたは IPv6 ルーターが割り当てるこれらの設定を受け入れます。

注 - DHCP サーバーが割り当てる IP アドレスまたはホスト名を決定するには、DHCP サーバーまたは IPv6 ルーターに付属しているネットワークツールを使用してください。

このセクションの手順に従って、割り当てられた設定が正しく動作していることをテストし、Oracle ILOM への接続をローカルおよびリモートで確立できます。

ローカルでログインするには、[46 ページの「ローカルのシリアル接続を使用した Oracle ILOM へのログイン」](#)を参照してください。

リモートでログインするには、サーバー SP に割り当てられた IP アドレス、ホスト名、または IPv6 ローカルリンク名を使用し、[47 ページの「リモート Ethernet 接続を使用した Oracle ILOM へのログイン」](#)の手順に従います。

▼ ローカルのシリアル接続を使用した **Oracle ILOM** へのログイン

この手順では、サーバー SP の IP アドレスを知っている必要はありません。ただし、Oracle ILOM 管理者アカウントを持っている必要があります。

注 - サーバーの出荷時に設定されているデフォルトの Oracle ILOM 管理者アカウントは root、パスワードは changeme です。このデフォルトの管理者アカウントが変更されている場合は、システム管理者に連絡して、管理者特権を持つ Oracle ILOM ユーザーアカウントを確認してください。

- 1 サーバーへのシリアルコンソール接続がセキュアで、正しく動作していることを確認します。
- 2 次のシリアル通信設定が構成されていることを確認します。
 - 8N1: データビット 8、パリティなし、ストップビット 1
 - 9600 ボー
 - ハードウェアのフロー制御無効 (CTS/RTS)
- 3 **Enter** キーを押して、シリアルコンソールと **Oracle ILOM** の間の接続を確立します。
Oracle ILOM へのログインプロンプトが表示されます。
- 4 管理者アカウントを使用して、**Oracle ILOM** のコマンド行インタフェース (CLI) にログインします。
Oracle ILOM に正常にログインしたことを示すデフォルトのコマンドプロンプト (->) が、Oracle ILOM に表示されます。

▼ リモート **Ethernet** 接続を使用した **Oracle ILOM** へのログイン

この手順では、Oracle ILOM 管理者アカウントを持っていることと、サーバー SP の IP アドレスまたはホスト名を知っていることが必要です。

注 - サーバーの出荷時に設定されているデフォルトの Oracle ILOM 管理者アカウントは **root**、パスワードは **changeme** です。このデフォルトの管理者アカウントが変更されている場合は、システム管理者に連絡して、管理者特権を持つ Oracle ILOM ユーザーアカウントを確認してください。

- 1 **Oracle ILOM** への接続を確立します。
 - **コマンド行インタフェース (CLI):** セキュアなシェルセッションを使用して、管理者アカウントのユーザー名と IP アドレス、あるいはサーバーの IP アドレスまたはホスト名を指定します。たとえば、**ssh username@host** と入力します。ここで、*host* はサーバー **SP** の IP アドレスまたはホスト名 (DNS を使用する場合) です。
パスワードの入力を求める Oracle ILOM のプロンプトが表示されます。
 - **Web ブラウザユーザーインタフェース (BUI):** Web ブラウザのアドレスフィールドにサーバーの IP アドレスを入力して、**Enter** を押します。
Oracle ILOM Web ログインページが表示されます。

2 次の関連するステップを実行して、ログインプロセスを完了します。

- **CLI: Oracle ILOM** パスワードプロンプトで、パスワードを入力して **Enter** を押します。例:

Password: **changeme**

Oracle ILOM に正常にログインしたことを示すデフォルトのコマンドプロンプト (->) が、Oracle ILOM に表示されます。

- **BUI: ILOM Web** ログインページで、ユーザー名とパスワードを入力して「**Log In**」をクリックします。

Oracle ILOM へのログインに成功したことを示す「**Summary**」ページが表示されます。

▼ Oracle ILOM CLI でのネットワーク設定の変更

Oracle ILOM CLI から、現在構成されているサーバーのネットワーク設定を変更するには、次の手順に従います。

注 - BIOS 設定ユーティリティを使用して、ネットワーク設定を変更することもできます。手順については、『Sun Server X2-4 サービスマニュアル』を参照してください。

- 1 [46 ページの「ローカルのシリアル接続を使用した Oracle ILOM へのログイン」](#) または [47 ページの「リモート Ethernet 接続を使用した Oracle ILOM へのログイン」](#) の方法を使用して、**Oracle ILOM CLI** にログインします。

注 - Ethernet 接続を使用して Oracle ILOM にログインした場合、ネットワーク設定を変更すると、接続が切断されるので、この新しい設定を使用してログインし直す必要があります。

- 2 ネットワーク環境に適合するネットワーク構成手順を実行し、ネットワーク設定をテストします。
 - **IPv4** ネットワーク設定を表示または構成するには、[手順 3 - 手順 4](#) を実行します。
 - **IPv6** ネットワーク設定を表示または構成するには、[手順 5 - 手順 8](#) を実行します。
 - **IPv4** または **IPv6** ネットワーク設定をテストするには、[54 ページの「Oracle ILOM CLI からの IPv4 または IPv6 ネットワーク構成のテスト」](#) を参照します。

- 3 IPv4 ネットワーク構成の場合、**cd** コマンドを使用して **/SP/network** ディレクトリに移動します。

```
-> cd /SP/network
```

- 4 次のいずれかを実行します。

- ネットワーク上に **DHCP** サーバーがある場合、次のコマンドを入力し、**DHCP** サーバーがサーバーに割り当てた設定を表示します。

```
-> show /SP/network
```

- **DHCP** サーバーがない場合、または設定を割り当てる場合、**set** コマンドを使用し、次の表にあるプロパティの値を割り当てます。例:

```
-> set /SP/network/ pendingipdiscovery=static
```

```
-> set /SP/network/ pendingipaddress=10.8.183.106
```

```
-> set /SP/network/ pendingipnetmask=255.255.255.0
```

```
-> set /SP/network/ pendingipgateway=10.8.183.254
```

```
-> set /SP/network/ commitpending=true
```

プロパティ	プロパティの設定値	説明
state	set state=enabled	ネットワークの状態はデフォルトで enabled に設定されています。
pendingipdiscovery	set pendingipdiscovery=static	静的ネットワーク構成を有効にするには、pendingipdiscovery を static に設定します。 デフォルトでは、pendingipdiscovery は dhcp に設定されています。
pendingipaddress	set pendingipaddress=	複数の静的ネットワーク設定を割り当てるには、各プロパティ値 (IP アドレス、ネットマスク、およびゲートウェイ) に対して、set コマンドに続けて pending コマンドを入力したあと、割り当てる静的な値を入力します。
pendingipnetmask	<ip_address>	
pendingipgateway	pendingipnetmask=<netmask> pendingipgateway=<gateway>	
commitpending	set commitpending=true	set commitpending=true と入力し、変更を確定します。

注 - Ethernet 接続を使用して Oracle ILOM にログインした場合、commitpending を true に設定してネットワーク設定の変更をコミットすると、Oracle ILOM 接続が切断されるので、この新しい設定を使用してログインし直す必要があります。

- 5 **IPv6** ネットワーク構成の場合、**cd** コマンドを使用して **SP/network/ipv6** ディレクトリに移動します。

-> **cd SP/network/ipv6**

- 6 **show** コマンドを入力して、デバイスで構成された **IPv6** ネットワーク設定を表示します。

次の例は、サーバーの SP デバイス上の IPv6 プロパティを対象としたサンプル出力の値です。

```
-> show
/SP/network/ipv6
Targets:

Properties:
  state = enabled
  autoconfig = stateless
  dhcpv6_server_duid = (none)
  link_local_ipaddress = fe80::214:4fff:feca:5f7e/64
  static_ipaddress = ::/128
  ipgateway = fe80::211:5dff:febe:5000/128
  pending_static_ipaddress = ::/128
  dynamic_ipaddress_1 fec0:a:8:b7:214:4fff:feca:5f7e/64

Commands:
  cd
  show
```

- 7 **IPv6** 自動構成オプションを構成するには、**set** コマンドを使用して、次の自動構成プロパティの値を指定します。

プロパティ	プロパティの設定値	説明
state	set state=enabled	IPv6 ネットワークの状態は、デフォルトで enabled になっています。IPv6 自動構成オプションを有効にするには、この state が enabled に構成されている必要があります。

プロパティ	プロパティの設定値	説明
autoconfig	set autoconfig=<value>	<p>このコマンドに続けて、autoconfig の設定値を指定します。</p> <p>次のオプションがあります。</p> <ul style="list-style-type: none">■ stateless (デフォルト設定) IPv6 ネットワークルーターから学習した IP アドレスを自動的に割り当てます。■ dhcpv6_stateless DHCPv6 サーバーから取得した DNS 情報を自動的に割り当てます。dhcpv6_stateless プロパティの値は、Oracle ILOM 3.0.14 以降で使用できます。■ dhcpv6_stateful DHCPv6 サーバーから取得した IPv6 アドレスを自動的に割り当てます。dhcpv6_stateful プロパティの値は、Oracle ILOM 3.0.14 以降で使用できます。■ disable 自動構成プロパティの値をすべて無効にし、リンクローカルアドレスの読み取り専用プロパティの値を設定します。

注 - IPv6 構成オプションは、構成後に有効になります。/network ターゲットでこれらの変更を確定する必要はありません。

注 - stateless 自動構成オプションを有効にすると、dhcpv6_stateless のオプションが有効になったとき、または dhcpv6_stateful のオプションが有効になったときに、それと同時に実行できます。ただし、dhcpv6_stateless 自動構成オプションと dhcpv6_stateful 自動構成オプションを同時に有効にしないでください。

- 8 静的 IPv6 アドレスを設定するには、次の手順を実行します。
- a. 次のプロパティタイプを指定します。

プロパティ	プロパティの設定値	説明
state	set state=enabled	IPv6 ネットワークの状態は、デフォルトで enabled になっています。静的 IP アドレスを有効にするには、この状態を enabled に設定する必要があります。
pendingipaddress	set pending_static_ipaddress =<ipv6_address>/<subnet mask length in bits>	このコマンドには、プロパティ値として、デバイスに割り当てる静的 IPv6 アドレスおよびネットマスクを指定します。IPv6 アドレスの例: fec0:a:8:b7:214:4f ff:feca:5f7e/64

b. 次のコマンドを入力して、保留中の **IPv6** 静的ネットワークパラメータを確定します。

```
-> set commitpending=true
```

注- ネットワーク設定は、確定するまで保留されます。サーバーに新しい静的 IP アドレスを割り当てると、サーバーとのアクティブな Oracle ILOM セッションがすべて終了します。Oracle ILOM にログインし直すには、新しく割り当てられた IP アドレスを使用して、新しいセッションを作成する必要があります。

9 ネットワークテストツール(Ping および Ping6)を使用して、Oracle ILOM で IPv4 または IPv6 のネットワーク構成をテストします。

詳細は、54 ページの「Oracle ILOM CLI からの IPv4 または IPv6 ネットワーク構成のテスト」を参照してください。

▼ Oracle ILOM Web インタフェースでのネットワーク設定の変更

Oracle ILOM Web インタフェースから、現在構成されているサーバーのネットワーク設定を変更するには、次の手順に従います。

注- BIOS 設定ユーティリティを使用して、ネットワーク設定を変更することもできます。手順については、『Sun Server X2-4 サービスマニュアル』を参照してください。

1 47 ページの「リモート Ethernet 接続を使用した Oracle ILOM へのログイン」内の関連するステップを使用して、Oracle ILOM Web インタフェースにログインします。

- 2 左側のナビゲーションツリーから、「**ILOM Administration**」>「**Connectivity**」と選択します。

「Network Settings」ページが表示されます。デバイスで構成された設定が表示されます。

- 3 使用中のネットワーク環境に適用するネットワーク構成手順を実行します。
 - **IPv4:** ネットワーク上の DHCP サーバーにネットワーク設定の割り当てを許可するには、「**DHCP**」ラジオボタンが選択されていることを確認して、「**Save**」をクリックします。
 - **IPv4:** ネットワーク設定を割り当てるには、「**Static**」ラジオボタンを選択して、「**IP Address**」、「**Netmask**」、および「**Gateway**」フィールドに入力します。次に「**Save**」をクリックします。
 - **IPv6:** 自動構成オプションを構成するには、「**State**」プロパティの横にある「**Enabled**」チェックボックスが選択されていることを確認します。次に、自動構成値を選択して「**Save**」をクリックします。

注 - 「Autoconfig Stateless」オプションを有効にすると、「DHCPv6 Autoconfig Stateless」のオプションが有効になったとき、または「DHCPv6 Autoconfig Stateful」のオプションが有効になったときに、それと同時に実行できます。

- **IPv6:** 静的 IPv6 アドレスを設定するには、「**State**」プロパティの横にある「**Enabled**」チェックボックスが選択されていることを確認します。次に、*ipv6_address/subnet mask length in bits* の値を「**Static IP Address**」フィールドに入力して、「**Save**」をクリックします。
- 4 ネットワークテストツール(Ping および Ping 6)を使用して、**Oracle ILOM** で IPv4 または IPv6 のネットワーク構成をテストします。
詳細は、[54 ページの「Oracle ILOM CLI からの IPv4 または IPv6 ネットワーク構成のテスト」](#)を参照してください。

▼ **Oracle ILOM CLI からの IPv4 または IPv6 ネットワーク構成のテスト**

- 1 CLI プロンプトで **show** コマンドを入力して、ネットワークの **test** ターゲットとプロパティを表示します。
たとえば、次の出力は、**test** ターゲットプロパティを示しています。

-> show
/SP/network/test
Targets:

Properties:
ping = (Cannot show property)
ping6 = (Cannot show property)

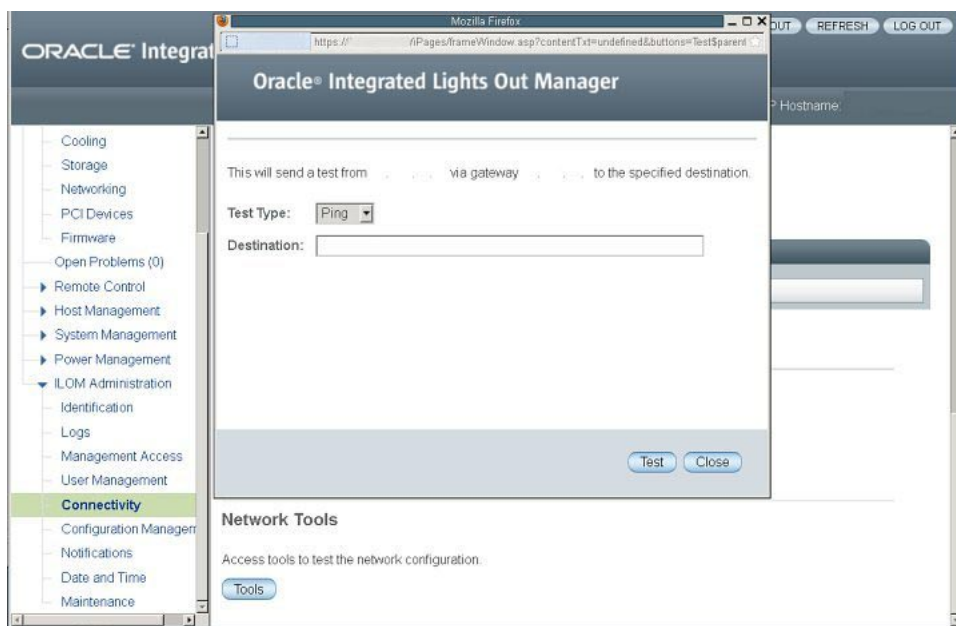
Commands:
cd
set
show
- 2 **set ping** または **set ping6** コマンドを使用して、ネットワークテストをデバイスから指定したネットワークの宛先に送信します。

プロパティ	プロパティの設定値	説明
ping	set ping=<IPv4_address>	コマンドプロンプトで set ping= コマンドを入力し、続けて IPv4 のテスト宛先アドレスを入力します。例: -> set ping=10.8.183.106 Ping of 10.8.183.106 succeeded

プロパティ	プロパティの設定値	説明
ping6	set ping6=<IPv6_address>	set ping6= コマンドに続けて、IPv6 のテスト宛先アドレスを入力します。例: -> set ping6=fe80::211:5dff:febe:5000 Ping of fe80::211:5dff:febe:5000 succeeded

▼ Oracle ILOM Web インタフェースからの IPv4 または IPv6 ネットワーク構成のテスト

- 1 「Network Settings」 ページで、ページの下部にある「Tools」 ボタンをクリックします。
「Network Configuration Test」 画面が表示されます。



- 2 「TestType」 リストボックスから「Ping」または「Ping6」を選択します。
IPv4 ネットワーク構成用の Ping テストを選択します。IPv6 ネットワーク構成用の Ping6 テストを選択します。

- 3 IPv4またはIPv6テストの宛先アドレスを「**Destination**」フィールドに入力して、「**Test**」をクリックします。
テストに成功すると、「Network Configuration Test」画面の「Destination」フィールドの下に「Ping of *ip_address* succeeded」というメッセージが表示されます。

▼ Oracle ILOM の終了

- Oracle ILOM セッションを終了するには:
 - Oracle ILOM CLI の CLI プロンプトで、**exit** と入力します。
 - Oracle ILOM Web インタフェースで、ページの右上隅にある「**Log Out**」ボタンをクリックします。

サーバーへの主電源の投入

Oracle ILOM に接続できることを確認し、オペレーティングシステムをインストールまたは構成する準備ができたなら、サーバーの主電源を入れます。

▼ サーバーへの主電源の投入

- 1 サーバーのフロントパネルにある電源/OK LED がスタンバイ電源モードにあることを確認します。
スタンバイ電源モードでは、電源/OK LED がスタンバイ点滅パターンで点灯 (0.1 秒間オン、2.9 秒間オフ) し、SP が動作していることを示します。
- 2 サーバーのフロントパネルにある埋め込み式の電源ボタンを押して、サーバーの主電源を入れます。

▼ 主電源の切断

- サーバーの主電源をオフにするには、次の 2 つの方法のいずれかを使用します。
 - 正常な停止 - フロントパネルにある電源ボタンを押してすぐに離します。**ACPI (Advanced Configuration and Power Interface)** が有効なオペレーティングシステムでは、これで適切な順序でのシャットダウンが実行されます。**ACPI** が有効なオペレーティングシステムを実行していないサーバーの場合は、即時にスタンバイ電源モードに移行して停止します。

- 緊急電源切断 – 主電源がオフになり、サーバーがスタンバイ電源モードに移行するまで、電源ボタンを少なくとも4秒間押し続けます。主電源がオフになると、フロントパネルにある電源/OK LED が点滅し、サーバーがスタンバイ電源モードにあることを示します。



注意 – サーバーの電源を完全に切断するには、サーバーのバックパネルにある AC 電源差し込み口から AC 電源コードを取り外します。

インストール済みの Oracle Solaris OS または Oracle VM ソフトウェアの構成

この章では、注文によりサーバーにインストール済みの Oracle Solaris オペレーティングシステム (OS) または Oracle VM ソフトウェアを構成するためのステップについて説明します。インストール済みの Solaris のバージョンは、Oracle Solaris 11 または Oracle Solaris 10 9/10 以上です。インストール済みの Oracle VM のバージョンは、3.0.2 以降、または 3.0.3 です。

インストール済みのオペレーティングシステムのバージョンに応じて、次のセクションにあるいずれかの手順を実行してください。

- 65 ページの「インストール済みの Oracle Solaris 11 オペレーティングシステムの構成」
- 68 ページの「インストール済みの Oracle Solaris 10 オペレーティングシステムの構成」
- 74 ページの「インストール済みの Oracle VM 3.0 ソフトウェアの構成」

オペレーティングシステムのオプション

表 5-1 に、このドキュメントの発行時に、Sun Server X2-4 で使用可能なインストール済みのオペレーティングシステムまたは仮想マシンソフトウェアの一覧を示します。

表 5-1 Sun Server X2-4 で使用可能なインストール済みの OS および VM ソフトウェア

オペレーティングシステム	サポートされているバージョン	構成情報の参照場所
Oracle Solaris	Oracle Solaris 10 9/10	<ul style="list-style-type: none"> ■ 68 ページの「インストール済みの Oracle Solaris 10 オペレーティングシステムの構成」 ■ 65 ページの「インストール済みの Oracle Solaris 11 オペレーティングシステムの構成」
	Oracle Solaris 11 11/11	
仮想マシンソフトウェア	Oracle VM 3.0.2 Oracle VM 3.0.3	<ul style="list-style-type: none"> ■ 74 ページの「インストール済みの Oracle VM 3.0 ソフトウェアの構成」

注 - Sun Server X2-4 上で使用可能なインストール済みオペレーティングシステムの最新リストについては、Sun x86 サーバー Web サイトにアクセスして、Sun Server X2-4 のページを参照してください (<http://www.oracle.com/technetwork/server-storage/sun-x86/overview/index.html>)。

ただし、サーバーでは、複数の異なるオペレーティングシステムをサポートしています。このため、必ずしもインストール済みの Oracle Solaris オペレーティングシステムまたは Oracle VM ソフトウェアのバージョンを使用する必要はありません。Oracle Solaris オペレーティングシステムや Oracle VM ソフトウェアの新規インストールまたは新しいバージョン、あるいは別のオペレーティングシステム (Linux、Microsoft Windows、VMware ESXi など) をインストールする場合、それがサポートされるバージョンであれば、インストールできます。サポートされるオペレーティングシステムのリストについては、『Sun Server X2-4 プロダクトノート』を参照してください。

サポートされているオペレーティングシステムのインストール手順については、次のドキュメントを参照してください。

- Oracle Solaris の場合は、『Sun Server X2-4 Oracle Solaris オペレーティングシステムインストールガイド』を参照してください
- Oracle VM の場合は、『Sun Server X2-4 Oracle VM インストールガイド』を参照してください
- Oracle Linux、Red Hat Enterprise Linux、および SUSE Linux Enterprise Server の場合は、『Sun Server X2-4 Linux オペレーティングシステムインストールガイド』を参照してください
- Windows Server 2008 の場合は、『Sun Server X2-4 Windows オペレーティングシステムインストールガイド』を参照してください

- VMware ESXi の場合は、Sun Server X2-4 VMware ESXi オペレーティングシステムのインストールに関するガイドを参照してください

Oracle Solaris 構成の準備

インストール済みの Oracle Solaris 10 または 11 オペレーティングシステムの構成を開始する前に、該当する RAID 構成の制限事項を確認してください。次に、Oracle Solaris 構成のワークシートを完成させます。

インストール済みの Oracle Solaris オペレーティングシステム上での RAID の制限

サーバーの RAID 構成はオプションです。ただし、Oracle Solaris のインストール済みイメージでは、非 RAID 構成のみ可能です。RAID 構成が必要な場合は、サーバー上で RAID を構成してから、目的の RAID 構成で Oracle Solaris OS (またはほかの OS) の新規インストールを実行する必要があります。

Oracle Solaris 10 および 11 の構成ワークシート

オペレーティングシステムの構成を開始する前に、次の表に示す構成ワークシートを用いて必要な情報を収集してください。使用するシステムのアプリケーションに関連する情報のみを収集する必要があります。

表 5-2 Oracle Solaris 10 および 11 オペレーティングシステム構成ワークシート

インストール用の情報	説明または例	回答: デフォルト (*)
言語	OS で使用可能な言語のリストから選択します。	英語*
ロケール	使用可能なロケールのリストから地理的地域を選択します。	
端末	使用可能な端末タイプのリストから、使用している端末のタイプを選択します。	
ネットワーク接続	システムがネットワークに接続されているかどうか。	<ul style="list-style-type: none"> ■ ネットワークに接続されている ■ ネットワークに接続されていない*
DHCP	システムで動的ホスト構成プロトコル (DHCP) を使用してネットワークインタフェースを設定できるかどうか。	<ul style="list-style-type: none"> ■ はい ■ いいえ*

表 5-2 Oracle Solaris 10 および 11 オペレーティングシステム構成ワークシート (続き)

インストール用の情報		説明または例	回答:デフォルト(*)
DHCPを使用しない場合は、ネットワークアドレスを入力します。	IP アドレス	DHCPを使用しない場合は、システムのIPアドレスを入力します。 例: 192.168.100.1	
	サブネット	DHCPを使用しない場合、システムはサブネットの一部かどうか。 そうである場合、サブネットのネットマスクは何か。 例: 255.255.255.0	255.255.0.0*
	IPv6	このマシンで Ipv6 を有効にするかどうか。	<div><div>■</div>はい</div> <div><div>■</div>いいえ*</div>
ホスト名		システムのホスト名を選択します。	
Kerberos		このマシンで Kerberos セキュリティーを構成するかどうか。 「はい」の場合、この情報を収集します。 デフォルトレルム: 管理サーバー: 最初の KDC: (オプション) 追加の KDC:	<div><div>■</div>はい</div> <div><div>■</div>いいえ*</div>

表 5-2 Oracle Solaris 10 および 11 オペレーティングシステム構成ワークシート (続き)

インストール用の情報		説明または例	回答: デフォルト (*)
ネームサービス	ネームサービス	該当する場合、このシステムでどのネームサービスを使用するか。	<ul style="list-style-type: none"> ■ NIS+ ■ NIS ■ DNS ■ LDAP ■ なし*
	ドメイン名	システムが所属するドメインの名前を入力します。	DNS または NIS
	NIS+ および NIS	NIS+ または NIS を選択した場合、ネームサーバーを指定するか、それともインストールプログラムに検索させるか。	<ul style="list-style-type: none"> ■ 指定する ■ 自動的に指定* <p>NIS を選択した場合:</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ NIS ドメインを指定する、または ■ NIS サーバーを指定するか、検索するかを指定する。
	DNS	<p>DNS を選択した場合、DNS サーバーの IP アドレスを指定します。少なくとも 1 つの IP アドレスを入力する必要があり、最大で 3 つのアドレスを入力できます。</p> <p>また、DNS クエリーを行う際に検索する DNS ドメインのリストを入力することもできます。</p> <p>検索ドメイン:</p> <p>検索ドメイン:</p> <p>検索ドメイン:</p>	
	LDAP	<p>LDAP を選択した場合、LDAP プロファイルに関する次の情報を指定します。</p> <p>プロファイル名:</p> <p>プロファイルサーバー:</p> <p>LDAP プロファイルにプロキシ認証レベルを指定する場合、次の情報を収集します。</p> <p>プロキシバインド識別名:</p> <p>プロキシバインドパスワード:</p>	

表 5-2 Oracle Solaris 10 および 11 オペレーティングシステム構成ワークシート (続き)

インストール用の情報	説明または例	回答: デフォルト (*)
デフォルトルート	<p>デフォルトルート IP アドレスを指定するか、OS インストールプログラムに自動検出させるか。</p> <p>デフォルトルートは、2つの物理ネットワーク間でトラフィックを転送するブリッジを提供します。IP アドレスは、ネットワーク上の各ホストを識別する一意の数字です。</p> <p>次の選択肢があります。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ IP アドレスを指定できます。指定された IP アドレスを使用し て、<code>/etc/defaultrouter</code> ファイルが作成されます。システムをリブートすると、指定された IP アドレスがデフォルトルートになります。 ■ OS インストールプログラムに IP アドレスを検出させることができます。ただし、その場合は、システムがルーターのあるサブネット上にあり、そのルーターが ルーター検索用のインターネット制御 メッセージプロトコル (ICMP) を使用して 自身を通知している必要があります。コマンド行インタフェースを使用する場合、システムのブート時にソフトウェアが IP アドレスを検出します。 ■ この時点でルーターを使用していない か、ソフトウェアによって IP アドレスを検出しない場合には、「なし」を選択することもできます。ソフトウェアは、リブート時に IP アドレスを自動的に検出しようとします。 	<ul style="list-style-type: none"> ■ 指定する ■ 検出する ■ なし*
タイムゾーン	デフォルトのタイムゾーンを指定する方法。	<ul style="list-style-type: none"> ■ 地理的地域* ■ GM からの時差 ■ タイムゾーンファイル
ルートパスワード	システム用のルートパスワードを選択します。	

インストール済みの Oracle Solaris 11 オペレーティングシステムの構成

このセクションでは、サーバーにインストール済みの Oracle Solaris 11 オペレーティングシステム (OS) の構成方法について説明します。インストール済みの OS イメージには、サーバーに必要なドライバがすべて組み込まれています。

サーバーに Oracle Solaris 10 9/10 (以降) オペレーティングシステムがインストール済みであれば、[68 ページの「インストール済みの Oracle Solaris 10 オペレーティングシステムの構成」](#)の手順を実行します。

注-インストール済み Oracle Solaris オペレーティングシステムのサポートされるバージョンに関する最新情報については、『Sun Server X2-4 プロダクトノート』を参照してください。

インストール済みの Oracle Solaris 11 オペレーティングシステムを構成するには、次の表の手順を、記載された順序で実行します。

手順	リンク
オペレーティングシステムのオプションを確認します。	59 ページの「オペレーティングシステムのオプション」
インストール済みオペレーティングシステム上での RAID の制限を確認します。	61 ページの「インストール済みの Oracle Solaris オペレーティングシステム上での RAID の制限」
構成時に必要な情報を収集します。	61 ページの「Oracle Solaris 10 および 11 の構成ワークシート」
インストール済みの Oracle Solaris オペレーティングシステムを構成します。	65 ページの「インストール済みの Oracle Solaris 11 オペレーティングシステムの構成」
Oracle Solaris オペレーティングシステムのドキュメントを確認します。	68 ページの「Oracle Solaris 11 オペレーティングシステムのドキュメント」

▼ インストール済みの Oracle Solaris 11 オペレーティングシステムの構成

[表 5-2](#) に示す 構成ワークシートを完成したら、次の手順に従って、インストール済みの Oracle Solaris 11 オペレーティングシステムを構成します。

注 - SPARC システムとは異なり、サーバーの電源を入れてもインストール済みの Solaris 11 イメージはモニターに出力されません。BIOS 電源投入時自己診断 (Power-On Self-Test、POST) とその他のブート情報が出力されます。

- 1 **Oracle ILOM** にログインしていない場合、ローカルでシリアル接続からログインするか、またはリモートで **Ethernet** 接続からログインします。

46 ページの「ローカルのシリアル接続を使用した **Oracle ILOM** へのログイン」または 47 ページの「リモート Ethernet 接続を使用した **Oracle ILOM** へのログイン」を参照してください。

注 - 次の手順では、Oracle ILOM 3.1 コマンド構文を使用します。Oracle ILOM 3.0 を使用している場合は、<http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=ilom30> で Oracle ILOM 3.0 ドキュメントコレクションを参照してください。

- 2 次の方法で、サーバーの電源を入れるか、サーバーをリセットします。

- サーバーの電源を入れるには、次のいずれかの方法を使用します。
 - **Oracle ILOM Web** インタフェースのナビゲーションツリーで、「System Information」>「Summary」を選択します。次に、「Actions」パネルで、「Power State」の横にある「Turn On」ボタンをクリックします。
 - **Oracle ILOM CLI** で、プロンプトから次のコマンドを入力します。

```
-> start /System
```

プロンプトが表示されたら、「y」と入力して確定します。

```
Are you sure you want to start /System (y/n)? y
```

```
Starting /System
```
- サーバーをリセットするには、次のいずれかの方法を使用します。
 - **Oracle ILOM Web** インタフェースから、ナビゲーションツリーで「Host Management」>「Power Control」を選択します。次に、「Select Action」リストボックスから「Reset」を選択して、「Save」をクリックします。
 - **Oracle ILOM CLI** で、プロンプトから次のコマンドを入力します。

```
-> reset /System
```

プロンプトが表示されたら、「y」と入力して確定します。

```
Are you sure you want to reset /System (y/n)? y
```

```
Performing hard reset on /System
```

サーバーがブートプロセスを開始します。

3 リモートコンソールを起動します。

- **Oracle ILOM CLI** の CLI プロンプトで、次のコマンドを入力します。

```
-> start /HOST/console
```

```
Are you sure you want to start /HOST/console (y/n)? y
```

```
Serial console started.
```

- **Oracle ILOM Web** インタフェースのナビゲーションツリーで、「**Remote Control**」>「**Redirection**」を選択します。次に、「**Launch Remote Console**」ボタンをクリックします。

サーバーのブート後に、「GRUB」メニューが表示されます。「GRUB」メニューで、表示の出力先を引き続きシリアルポートにするか、表示の出力先をビデオポートに接続されたデバイスにするかを選択できます。

```
GNU GRUB Version 0.97 (607K lower / 2087168K)
```

```
s11_2011.11_a - Serial Port (ttya)
```

```
s11_2011.11_a - Graphics Adapter
```

4 上下の矢印キーを使用して表示オプションを選択し、**Enter**を押します。

注-デフォルトでは、システムはシリアルポートへの出力を表示します。「GRUB」メニューでオプションを選択しないと、10 秒後に「GRUB」メニューが使用できなくなり、システムは出力先をシリアルポートにしたまま続行します。

上下の矢印キーを使用して、強調表示するエントリを選択します。選択した OS をブートするには **Enter** を、ブート前にコマンドを編集するには「**E**」を、コマンド行を開始するには「**C**」を押します。

- 出力をシリアルポートに表示するには、次のオプションを選択します。

```
s11_2011.11_a - Serial Port (ttya)
```

- 出力をビデオポートに表示するには、次のオプションを選択します。

```
s11_2011.11_a - Graphics Adapter
```

表示をビデオポートに出力することを選択した場合、デバイスをサーバーの VGA コネクタに接続し、入力デバイス (USB キーボードまたはマウス) に接続してから、そのデバイスから構成を完了する必要があります。デバイスとサーバーの接続についての詳細は、[42 ページの「サーバーへのケーブルの接続」](#)を参照してください。

- 5 **Oracle Solaris 11** インストーラの画面に表示されるプロンプトに従ってオペレーティングシステムを構成します。

プロンプトに従ってシステムとネットワークの情報を指定するときは、[61 ページ](#)の「**Oracle Solaris 10 および 11 の構成ワークシート**」で収集した情報が役立ちます。

サーバーへのネットワーク情報の割り当てに選択した方法 (DHCP または静的 IP アドレス) によって、表示される画面が異なります。

システム構成情報を入力すると、サーバーのブートプロセスが完了し、Oracle Solaris ログインプロンプトが表示されます。

Oracle Solaris 11 オペレーティングシステムのドキュメント

このセクションには、Oracle Solaris 11 オペレーティングシステムに関する情報の参照先を示します。指定されている場合は、x86 システム固有の説明手順に従ってください。

Oracle Solaris 11 Information Library は、次の場所にあります。http://docs.oracle.com/cd/E23824_01/

- Oracle Solaris 11 オペレーティングシステムのインストール手順の詳細は、『Oracle Solaris 11 システムのインストール』:「イントールの準備」および『Oracle Solaris 11 システムのインストール』:「メディアからブートする自動インストール」を参照してください。
- Oracle Solaris 10 から Oracle Solaris 11 へのオペレーティングシステムの移行については、『Oracle Solaris 10 から Oracle Solaris 11 への移行』および『Oracle Solaris 10 JumpStart から Oracle Solaris 11 自動インストーラへの移行』を参照してください。
- パッチおよびその他の最新情報については、『Sun Server X2-4 プロダクトノート』を参照してください。
パッチおよびパッチのインストール手順については、My Oracle Support Web サイト (<http://support.oracle.com>) にアクセスしてください

インストール済みの Oracle Solaris 10 オペレーティングシステムの構成

このセクションでは、サーバーにインストール済みの Oracle Solaris 10 オペレーティングシステム (OS) の構成方法について説明します。インストール済みの OS イメージには、サーバーに必要なドライバがすべて組み込まれています。

サーバーに Oracle Solaris 11 オペレーティングシステムがインストール済みであれば、[65 ページ](#)の「**インストール済みの Oracle Solaris 11 オペレーティングシステムの構成**」の手順を実行します。

インストール済みの Oracle Solaris 10 オペレーティングシステムを構成するには、次の表の手順を、記載された順序で実行します。

手順	リンク
オペレーティングシステムのオプションを確認します。	59 ページの「オペレーティングシステムのオプション」
インストール済みオペレーティングシステム上での RAID の制限を確認します。	61 ページの「インストール済みの Oracle Solaris 10 オペレーティングシステム上での RAID の制限」
Oracle Solaris 10 のアプリケーションに関連する情報を収集します。	61 ページの「Oracle Solaris 10 および 11 の構成ワークシート」
インストール済みの Oracle Solaris 10 オペレーティングシステムを構成します。	69 ページの「インストール済みの Oracle Solaris 10 オペレーティングシステムの構成」
Oracle Solaris 10 オペレーティングシステムのドキュメントを確認します。	71 ページの「Oracle Solaris 10 オペレーティングシステムのドキュメント」

▼ インストール済みの Oracle Solaris 10 オペレーティングシステムの構成

表 5-2 に示された構成ワークシートを完成したら、次の手順に従って、インストール済みの Oracle Solaris 10 オペレーティングシステムを構成します。

注 - SPARC システムとは異なり、サーバーの電源を入れてもインストール済みの Solaris 10 イメージはモニターに出力されません。BIOS 電源投入時自己診断 (Power-On Self-Test、POST) とその他のブート情報が出力されます。

- 1 **Oracle ILOM** にログインしていない場合、ローカルでシリアル接続からログインするか、またはリモートで **Ethernet** 接続からログインします。
[46 ページの「ローカルのシリアル接続を使用した Oracle ILOM へのログイン」](#) または [47 ページの「リモート Ethernet 接続を使用した Oracle ILOM へのログイン」](#) を参照してください。

注 - 次の手順では、Oracle ILOM 3.1 コマンド構文を使用します。Oracle ILOM 3.0 を使用している場合は、<http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=ilom30> で Oracle ILOM 3.0 ドキュメントコレクションを参照してください。

- 2 次の方法で、サーバーの電源を入れるか、サーバーをリセットします。
 - サーバーの電源を入れるには、次のいずれかの方法を使用します。

- **Oracle ILOM Web** インタフェースのナビゲーションツリーで、「System Information」>「Summary」を選択します。次に、「Actions」パネルで、「Power State」の横にある「Turn On」ボタンをクリックします。
- **Oracle ILOM CLI** で、プロンプトから次のコマンドを入力します。
 -> **start /System**
 プロンプトが表示されたら、「y」と入力して確定します。
 Are you sure you want to start /System (y/n)? y
 Starting /System
- サーバーをリセットするには、次のいずれかの方法を使用します。
 - **Oracle ILOM Web** インタフェースから、ナビゲーションツリーで「Host Management」>「Power Control」を選択します。次に、「Select Action」リストボックスから「Reset」を選択して、「Save」をクリックします。
 - **Oracle ILOM CLI** で、プロンプトから次のコマンドを入力します。
 -> **reset /System**
 プロンプトが表示されたら、「y」と入力して確定します。
 Are you sure you want to reset /System (y/n)? y
 Performing hard reset on /System

サーバーがブートプロセスを開始します。

3 リモートコンソールを起動します。

- **Oracle ILOM CLI** の CLI プロンプトで、次のコマンドを入力します。
 -> **start /HOST/console**
 Are you sure you want to start /HOST/console (y/n)? y
 Serial console started.
- **Oracle ILOM Web** インタフェースのナビゲーションツリーで、「Remote Control」>「Redirection」を選択します。次に、「Launch Remote Console」ボタンをクリックします。

サーバーのブート後に、「GRUB」メニューが表示されます。「GRUB」メニューで、表示の出力先を引き続きシリアルポートにするか、表示の出力先をビデオポートに接続されたデバイスにするかを選択できます。

GNU GRUB version 0.97 (607K lower / 2087168K upper memory)

```
s10x_u9wos_14a - Serial Port (ttya)
s10x_u9wos_14a - Graphics Adapter
s10x_u9wos_14a failsafe
```

4 上下の矢印キーを使用して表示オプションを選択し、Enterを押します。

注-デフォルトでは、システムはシリアルポートへの出力を表示します。「GRUB」メニューでオプションを選択しないと、10 秒後に「GRUB」メニューが使用できなくなり、システムは出力先をシリアルポートにしたまま続行します。

上下の矢印キーを使用して、強調表示するエントリを選択します。選択した OS をブートするには Enter を、ブート前にコマンドを編集するには「E」を、コマンド行を開始するには「C」を押します。

- シリアルポートへの出力を表示するには、次のオプションを選択します。

`s10x_u9wos_14a - Serial Port (ttya)`

- ビデオポートへの出力を表示するには、次のオプションを選択します。

`s10x_u9wos_14a - Graphics Adapter`

表示をビデオポートに出力することを選択した場合、デバイスをサーバーの VGA コネクタに接続し、入力デバイス (USB キーボードとマウス) に接続してから、そのデバイスから構成を完了する必要があります。デバイスとサーバーの接続についての詳細は、[42 ページの「サーバーへのケーブルの接続」](#)を参照してください。

- 5 **Oracle Solaris 10** インストーラの画面に表示されるプロンプトに従ってオペレーティングシステムを構成します。

プロンプトに従ってシステムとネットワークの情報を指定するときは、[61 ページの「Oracle Solaris 10 および 11 の構成ワークシート」](#)で収集した情報が役立ちます。

サーバーへのネットワーク情報の割り当てに選択した方法 (DHCP または静的 IP アドレス) によって、表示される画面が異なります。

システム構成情報を入力すると、サーバーのブートプロセスが完了し、Oracle Solaris ログインプロンプトが表示されます。

Oracle Solaris 10 オペレーティングシステムのドキュメント

このセクションには、Oracle Solaris 10 オペレーティングシステムに関する情報の参照先を示します。指定されている場合は、x86 システム固有の説明手順に従ってください。

Oracle Solaris 10 OS のドキュメントは、Oracle ドキュメント Web サイト (<http://docs.oracle.com/cd/E19253-01/index.html>) で入手できます。

「Oracle Solaris 10 9/10 Release and Information Collection」セクションまでページをスクロールし、Solaris 10 9/10 ドキュメントコレクションのドキュメントリストを表示してください。

- Oracle Solaris 10 のインストールガイドについては、『Solaris 10 9/10 インストールガイド (インストールとアップグレードの計画)』、『Solaris 10 9/10 インストールガイド (基本編)』、および『Solaris 10 9/10 インストールガイド (ネットワークインストール)』を参照してください。
- システムのアップグレードについては、『Solaris 10 9/10 インストールガイド (Solaris Live Upgrade とアップグレードの計画)』を参照してください。
- トラブルシューティングの情報については、『Solaris 10 9/10 インストールガイド (カスタム JumpStart/ 上級編)』の「付録 A」を参照してください。
- パッチおよびその他の最新情報については、『Sun Server X2-4 プロダクトノート』を参照してください。

パッチおよびパッチのインストール手順については、My Oracle Support Web サイト (<http://support.oracle.com>) にアクセスしてください

Oracle Solaris 10 または 11 オペレーティングシステムの再インストール

Oracle Solaris 10 または 11 OS を再インストールする場合や、別バージョンの Oracle Solaris OS をインストールする場合は、関連する Oracle Solaris インストールガイドを参照してください。

Oracle Solaris オペレーティングシステムのダウンロード

Oracle Solaris OS のソフトウェアは、次のサイトからダウンロードできます。

- Oracle Solaris 11 オペレーティングシステムをダウンロードするには、次にアクセスしてください。

<http://www.oracle.com/technetwork/server-storage/solaris11/downloads/index.html>

- Oracle Solaris 10 オペレーティングシステムをダウンロードするには、次にアクセスしてください。

<http://www.oracle.com/technetwork/server-storage/solaris10/downloads/index.html>

- Oracle Solaris パッチをダウンロードするには、次にアクセスしてください。

<http://support.oracle.com>

Oracle VM 構成の準備

インストール済みの Oracle VM ソフトウェアの構成を開始する前に、Oracle VM Server の互換性要件を確認してください。次に、Oracle VM 構成のワークシートを完成させます。

インストール済みの Oracle VM Server の互換性要件

システムにインストール済みの Oracle VM Server ソフトウェアを使用する場合は、Oracle VM インフラストラクチャーの管理に使用する Oracle VM Manager のバージョンと互換性があることを確認する必要があります。互換性を確保する必要がある場合は、Oracle VM Manager をアップグレードしてバージョンを一致させてください。

Oracle VM ソフトウェアのアップグレードについては、『Oracle VM インストールおよびアップグレードガイド』を参照してください。Oracle VM のドキュメントは次の Web サイトで入手できます。<http://www.oracle.com/technetwork/documentation/vm-096300.html>

Oracle VM 構成ワークシート

Oracle VM Server の構成を開始する前に、このセクションのワークシートを使用して必要な情報を収集してください。

表 5-3 Oracle VM Server 構成用ワークシート

構成用の情報		説明または例	回答
Oracle VM Server のパスワード	Root	root パスワードを選択します。文字および長さに制限はありません。	
	Oracle VM エージェント	Oracle VM エージェントのパスワードを選択します。パスワードは6文字以上にする必要があります。	
ネットワークインタフェース		サーバーの管理に使用するインタフェースを指定します。	

表 5-3 Oracle VM Server 構成用ワークシート (続き)		
構成用の情報		説明または例
ネットワーク構成	静的 IP アドレス	サーバーの IP アドレスを指定します。静的 IP アドレスは必須です。 例: 192.0.2.0
	ネットマスク	サーバーがサブネットの一部である場合、そのサブネットのネットマスクを指定します。 例: 255.255.0.0
	ゲートウェイ	サーバーにゲートウェイ経由でアクセスする場合は、ゲートウェイの IP アドレスを指定します。
	DNS サーバー	ドメイン名サーバー (DNS) の IP アドレスを指定します。(ちょうど) 1 つの DNS が必要です。
ホスト名		サーバーの完全修飾ドメイン名を指定します。 例: xxx.oracle.com

インストール済みの Oracle VM 3.0 ソフトウェアの構成

このセクションでは、注文済みの場合に、サーバーにインストール済みの Oracle VM ソフトウェアを構成する方法について説明します。インストール済みのイメージには、サーバーに必要なすべてのドライバが含まれています。

注- インストール済み Oracle VM のサポートされるバージョンに関する最新情報については、『Sun Server X2-4 プロダクトノート』を参照してください。

インストール済みの Oracle VM ソフトウェアを構成するには、次の表の手順を、記載された順序で実行します。

手順	リンク
Oracle VM ソフトウェアの要件を確認します。	73 ページの「インストール済みの Oracle VM Server の互換性要件」
構成時に必要な情報を収集します。	73 ページの「Oracle VM 構成ワークシート」

手順	リンク
インストール済みの Oracle VM ソフトウェアを構成します。	75 ページの「インストール済み Oracle VM Server の構成」
Oracle VM の使用を開始します。	78 ページの「Oracle VM のドキュメント」

▼ インストール済み Oracle VM Server の構成

これらの手順では、サーバーにインストール済みの Oracle VM Server を構成する方法についてのみ説明します。Oracle VM には、Oracle VM Manager など、別のコンポーネントもあり、仮想マシン環境をサポートするには、これらのコンポーネントがインストールされているか、すでに稼働している必要があります。

- 1 **Oracle ILOM** にログインしていない場合は、ローカルでシリアル接続からログインするか、またはリモートで **Ethernet** 接続を使用してログインします。

注 - 次の手順では、Oracle ILOM 3.1 コマンド構文を使用します。Oracle ILOM 3.0 を使用している場合は、<http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=ilom30> で Oracle ILOM 3.0 ドキュメントコレクションを参照してください。

- 2 次の方法で、サーバーの電源を入れるか、サーバーをリセットします。
 - サーバーの電源を入れるには、次のいずれかの方法を使用します。
 - **Oracle ILOM Web** インタフェースのナビゲーションツリーで、「System Information」>「Summary」を選択します。次に、「Actions」パネルで、「Power State」の横にある「Turn On」ボタンをクリックします。
 - **Oracle ILOM CLI** で、プロンプトから次のコマンドを入力します。

```
-> start /System
```

プロンプトが表示されたら、「y」と入力して確定します。

```
Are you sure you want to start /System (y/n)? y
```

```
Starting /System
```
 - サーバーをリセットするには、次のいずれかの方法を使用します。
 - **Oracle ILOM Web** インタフェースから、ナビゲーションツリーで「Host Management」>「Power Control」を選択します。次に、「Select Action」リストボックスから「Reset」を選択して、「Save」をクリックします。
 - **Oracle ILOM CLI** で、プロンプトから次のコマンドを入力します。

```
-> reset /System
```

プロンプトが表示されたら、「y」と入力して確定します。

```
Are you sure you want to reset /System (y/n)? y
```

```
Performing hard reset on /System
```

サーバーがブートプロセスを開始します。

3 リモートコンソールを起動します。

- **Oracle ILOM Web** インタフェースのナビゲーションツリーで、「**Remote Control**」 > 「**Redirection**」を選択します。次に、「**Launch Remote Console**」ボタンをクリックします。

- **Oracle ILOM CLI** の CLI プロンプトで、次のコマンドを入力します。

```
-> start /HOST/console
```

```
Are you sure you want to start /HOST/console (y/n)? y
```

```
Serial console started.
```

サーバーのブート後に、「GRUB」メニューが表示されます。「GRUB」メニューで、表示の出力先を引き続きシリアルポートにするか、表示の出力先をビデオポートに接続されたデバイスにするかを選択できます。

```
GNU GRUB version 0.97 (613K lower / 2087424K upper memory)
```

```
Oracle VM Server-ovs (xen-4.0.0 2.6.32.21-41ovs)
```

```
Oracle VM Server-ovs serial console (xen-4.0.0 2.6.32.21-41ovs)
```

4 上下の矢印キーを使用して表示オプションを選択し、Enter を押します。

注- 「GRUB」メニューでオプションを選択しないと、5秒後に「GRUB」メニューが使用できなくなり、システムは出力先をシリアルポートにしたまま続行します。「GRUB」メニューで一時停止するには、Enter 以外の任意のキーを押します。次に、使用するオプションを選択し、Enter を押して続行します。

上下の矢印キーを使用して、強調表示するエントリを選択します。選択した OS をブートするには Enter を、ブート前にコマンドを編集するには「E」を、コマンド行を開始するには「C」を押します。

メニューに2つの選択肢、すなわち、通常ブートとシリアルコンソール対応のブートが表示されます。

- デフォルトオプションを表示するには、リストの最初のオプションを選択します。

```
Oracle VM Server-ovs (xen-4.0.0 2.6.32.32-41ovs)
```

- 出力をシリアルポートに表示するには、リストの2番目のオプションを選択します。

```
Oracle VM Server-ovs serial console (xen-4.0.0 2.6.32.21-41ovs)
```

- 5 構成プロセスが進み、次の画面が表示されます。画面をスクロールダウンして、**root** のパスワードと **Oracle VM Agent** のパスワードを設定および確認します。

```

Starting OVM console server: [ OK ]
Starting OVM ovmwatch services: [ OK ]
Starting ovs-agent: Starting ovs-agent services:
    OK 1 [ OK ]

Configuring Oracle VM...

Enter new root password:
Confirm password:

Enter new Oracle VM Agent password:
Confirm password:

Configuring network.

```

注 - root および Oracle VM Agent のパスワードの入力を求めるプロンプトは、Oracle VM Server を最初にブートしたときだけ表示されます。

- 6 プロンプトに従ってオンボードのネットワークインタフェースコントローラ (NIC) を選択し、ネットワークに関するほかの必須情報を構成および入力します。

```

This tool is used to select the NIC used by the OVM Manager.
You can exit at any time by pressing CTRL-C.

Here's the list of current available network interfaces.
    eth0  eth1  eth2  eth3

Please select interface(s) to be used for OVM management.
These interfaces will be configured for redundancy.
eth1

```

- 7 すべての構成内容が正しければ、「Y」と入力し、**Enter** を押して設定を保存します。

```

Are these settings correct?(Y/n)

```

すべての設定を入力して保存すると、次に示すとおり、Oracle VM Server コンソールセッションがロードされます。

```
Oracle VM Server 3.0.2 Console [Alt-F2 for login console]

Local hostname      : lnxp-ovm.us.oracle.com
Manager UUID       : 0004fb0000010000a060c639d1075957
Hostname           : None
Server IP          : None
Server Pool        : None
Clustered          : No
Server Pool Virtual IP : None
Cluster state      : Offline
Master Server      : No
Cluster type       : None
Cluster storage    : None

OVS Agent          : Running
VMs running        : 0
System memory      : 4087
Free memory        : 2439
Uptime             : 0 days, 4 hours, 33 minutes_
```

これで、仮想オペレーティングシステムを作成するための、インストール済み Oracle VM Server の構成が完了します。

Oracle VM のドキュメント

Oracle VM の使用に関する詳細は、次で入手できる Oracle VM のドキュメントを参照してください。<http://www.oracle.com/technetwork/documentation/vm-096300.html>

オペレーティングシステムのインストール

オペレーティングシステムをインストールしたり、またはサーバーの出荷時にオペレーティングシステムがインストール済みの場合は、インストール済みのオペレーティングシステムを構成したりできます。

この章は、次の項目で構成されています。

- [79 ページの「オペレーティングシステムのインストール」](#)

オペレーティングシステムのインストール

表 6-1 は、このドキュメントの発行時点で、Sun Server X2-4 上でのインストールと使用がサポートされているオペレーティングシステムと、各オペレーティングシステムのインストール手順の参照場所を示しています。

注 – Sun Server X2-4 上でサポートされるオペレーティングシステムの最新リストについては、Sun x86 サーバー Web サイトにアクセスして、Sun Server X2-4 のページを参照してください (<http://www.oracle.com/technetwork/server-storage/sun-x86/overview/index.html>)。

表 6-1 サポートされているオペレーティングシステム

オペレーティングシステム	サポートされているバージョン	詳細については、次を参照してください。
Oracle Solaris	<ul style="list-style-type: none"> ■ Oracle Solaris 11 11/11 ■ Oracle Solaris 10 8/11 ■ Oracle Solaris 10 9/10 	<ul style="list-style-type: none"> ■ Sun Server X2-4 Oracle Solaris オペレーティングシステムインストールガイド。

表 6-1 サポートされているオペレーティングシステム (続き)

オペレーティングシステム	サポートされているバージョン	詳細については、次を参照してください。
Linux	<ul style="list-style-type: none"> ■ Oracle Unbreakable Enterprise Kernel ■ Oracle Linux 5.5 - 6.2 ■ Red Hat Enterprise Linux (RHEL) 5.8 ■ SUSE Linux Enterprise Server (SLES) 11 SP1、SP2 	<ul style="list-style-type: none"> ■ Oracle Hardware Installation Assistant を使用して Linux OS をインストールする場合は、『Oracle Hardware Installation Assistant 2.5 ユーザーズガイド x86 サーバー版』を参照してください。 ■ インストールメディアから Linux OS をインストールする場合は、『Sun Server X2-4 Linux オペレーティングシステムインストールガイド』を参照してください。
Oracle VM ソフトウェア	<ul style="list-style-type: none"> ■ Oracle VM 3.0.x ■ Oracle VM 2.2.1 	<ul style="list-style-type: none"> ■ Sun Server X2-4 Oracle VM インストールガイド。
Windows	<ul style="list-style-type: none"> ■ Microsoft Windows Server 2008 SP2/R2、Standard Edition、64 ビット ■ Microsoft Windows Server 2008 SP2/R2、Enterprise Edition、64 ビット ■ Microsoft Windows Server 2008 SP2/R2、Datacenter Edition、64 ビット 	<ul style="list-style-type: none"> ■ Oracle Hardware Installation Assistant を使用して Windows OS をインストールする場合は、『Oracle Hardware Installation Assistant 2.5 ユーザーズガイド x86 サーバー版』を参照してください。 ■ インストールメディアから Windows OS をインストールする場合は、『Sun Server X2-4 Windows オペレーティングシステムインストールガイド』を参照してください。

サーバーファームウェアとソフトウェアの入手

このセクションでは、サーバーのファームウェアとソフトウェアにアクセスするためのオプションについて説明します。

- [81 ページの「ファームウェアとソフトウェアの更新」](#)
- [82 ページの「ファームウェアとソフトウェアへのアクセスオプション」](#)
- [82 ページの「入手可能なソフトウェアリリースパッケージ」](#)
- [83 ページの「ファームウェアとソフトウェアへのアクセス」](#)
- [87 ページの「更新のインストール」](#)

ファームウェアとソフトウェアの更新

サーバー用のハードウェアドライバやツールなどのファームウェアおよびソフトウェアは、定期的に更新されます。これらは、ソフトウェアリリースとして入手可能になります。ソフトウェアリリースは、サーバー用の使用可能なファームウェア、ハードウェアドライバ、ユーティリティをすべて含んだ一連のダウンロード(パッチ)です。これらはすべてまとめてテストされています。ダウンロードに含まれる ReadMe ドキュメントには、以前のソフトウェアリリースからの変更点および変更されていない点について説明されています。

サーバーのファームウェアとソフトウェアは、ソフトウェアリリースが入手可能になり次第、更新してください。ソフトウェアリリースにはしばしばバグの修正が含まれるため、更新により、サーバーソフトウェアと、最新のサーバーファームウェアおよびほかのコンポーネントのファームウェアとソフトウェアとの互換性が保証されます。

ダウンロードパッケージ内の ReadMe ファイルには、ダウンロードパッケージ内の更新されたファイル、および現在のリリースで修正されたバグに関する情報が含まれます。プロダクトノートには、サポートされるサーバーソフトウェアのバージョンに関する情報も含まれます。

ファームウェアとソフトウェアへのアクセスオプション

次のオプションのいずれかを使用して、使用するサーバー用の最新ファームウェアおよびソフトウェアセットを入手します。

- **Oracle Hardware Installation Assistant** – Oracle Hardware Installation Assistant は Sun Server X2-4 の出荷時にインストール済みの機能で、サーバーファームウェアおよびソフトウェアを簡単に更新できるようにします。
- Oracle Hardware Installation Assistant の詳細については、『Oracle Hardware Installation Assistant 2.5 ユーザーガイド x86 サーバー版』(<http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=hia>) を参照してください。
- **My Oracle Support** – すべてのシステムファームウェアおよびソフトウェアは、My Oracle Support Web サイトから入手できます。
My Oracle Support Web サイトで入手可能なものの詳細については、<http://support.oracle.com> を参照してください。
My Oracle Support からソフトウェアリリースをダウンロードする方法については、83 ページの「[My Oracle Support を使用したファームウェアとソフトウェアのダウンロード](#)」を参照してください。
- 物理メディアのリクエスト (PMR) – My Oracle Support から入手可能なダウンロード (パッチ) を含む DVD をリクエストできます。
詳細は、84 ページの「[物理メディアのリクエスト](#)」を参照してください。

入手可能なソフトウェアリリースパッケージ

My Oracle Support では、ダウンロードは製品ファミリ、製品、およびバージョン別にグループ分けされています。バージョンには1つ以上のダウンロード (パッチ) が含まれます。

サーバーとブレードの場合、パターンは似ています。製品はサーバーです。サーバーごとにリリースセットが含まれます。これらのリリースは、実際のソフトウェア製品リリースではなく、サーバーの更新リリースのことです。これらの更新はソフトウェアリリースと呼ばれ、まとめてテスト済みの複数のダウンロードで構成されます。各ダウンロードには、ファームウェア、ドライバ、またはユーティリティが含まれます。

次の表に示すように、My Oracle Support には、このサーバーファミリ向けの同じダウンロードタイプのセットが含まれます。これらは物理メディアのリクエスト (PMR) によってリクエストすることもできます。

パッケージ名	説明	このパッケージをダウンロードする タイミング
X4470 M2 SERVER SW 1.3 – ILOM_AND_BIOS	Oracle ILOM および BIOS。	最新のプラットフォーム ファームウェアが必要です。
X4470 M2 SERVER SW 1.3 – ORACLE_HARDWARE_ INSTALLATION_ASSISTANT	Oracle Hardware Installation Assistant の回復と ISO 更新イ メージ。	Oracle Hardware Installation Assistant を手動で回復するか 更新する必要があります。
X4470 M2 SERVER SW 1.3 – TOOLS_DRIVERS_AND_ FIRMWARE_DVD	ツールおよびドライバおよび プラットフォームファーム ウェアが含まれます。この DVD イメージには Oracle VTS は含まれません。	システムファームウェアと OS 固有のソフトウェアの組み合 わせを更新する必要があります。
X4470 M2 SERVER SW 1.0 – DIAGNOSTICS	Oracle VTS 診断イ メージ。	Oracle VTS 診断イ メージが必 要です。

ファームウェアとソフトウェアへのアクセス

このセクションでは、ソフトウェアリリースファイルをダウンロードまたはリクエ
ストする方法について説明します。次を参照してください。

- 83 ページの「My Oracle Support を使用したファームウェアとソフトウェアのダウ
ンロード」
- 84 ページの「物理メディアのリクエスト」

▼ My Oracle Support を使用したファームウェアとソ フトウェアのダウンロード

- 1 Web サイト <http://support.oracle.com> にアクセスします。
- 2 My Oracle Support にサインインします。
- 3 ページ上部にある「パッチと更新版」タブをクリックします。
「パッチと更新版」画面が表示されます。
- 4 「検索」画面で、「製品またはファミリー(拡張)」をクリックします。
画面に検索フィールドが表示されます。
- 5 「製品」フィールドで、ドロップダウンリストから製品を選択します。
あるいは、目的の製品が表示されるまで製品名のすべてまたは一部 (Sun Server X2-4
など) を入力します。

- 6 「リリース」フィールドで、ドロップダウンリストからソフトウェアリリースを選択します。
使用可能なすべてのソフトウェアリリースを表示するには、フォルダを展開します。
- 7 「検索」をクリックします。
ソフトウェアリリースは、ダウンロード (パッチ) のセットで構成されます。
入手可能なダウンロードについての詳細は、[82 ページの「入手可能なソフトウェアリリースパッケージ」](#)を参照してください。
- 8 パッチを選択するには、パッチ名の横にあるチェックボックスをクリックします。(Shift キーを使用すると複数のパッチを選択できます。)
アクションパネルがポップアップ表示されます。このパネルには複数のアクションのオプションが表示されます。
- 9 更新をダウンロードするには、ポップアップパネルの「ダウンロード」をクリックします。
「ファイル・ダウンロード」ダイアログボックスが表示されます。
- 10 「ファイル・ダウンロード」ダイアログボックスで、パッチの **zip** ファイルをクリックします。
パッチファイルがダウンロードされます。

物理メディアのリクエスト

Oracle Web サイトからダウンロードできない場合は、物理メディアのリクエスト (PMR) で最新のソフトウェアリリースを入手できます。

次の表に、物理メディアをリクエストするためのハイレベルタスク、および詳細情報の入手先のリンクを示します。

説明	リンク
リクエストに必要な情報を収集します。	85 ページの「物理メディアのリクエスト用の情報を収集する」
オンラインまたは Oracle サポートに電話して物理メディアをリクエストします。	85 ページの「物理メディアのリクエスト (オンライン)」 86 ページの「物理メディアのリクエスト (電話)」

物理メディアのリクエスト用の情報を収集する

物理メディアのリクエスト (PMR) を行うには、サーバーの保証またはサポート契約が必要です。

PMR を実行する前に、次の情報を収集します。

- 製品名、ソフトウェアリリースのバージョン、および必須パッチを入手します。最新のソフトウェアリリースおよびリクエストしているダウンロードパッケージ (パッチ) の名前を知っていると、リクエストを実行しやすくなります。
- *My Oracle Support* にアクセスできる場合 – 83 ページの「[My Oracle Support を使用したファームウェアとソフトウェアのダウンロード](#)」の指示に従って、最新のソフトウェアリリースを確認し、入手可能なダウンロード (パッチ) を表示します。パッチのリストを表示したあと、ダウンロード手順を続行しない場合は「パッチ検索結果」ページからほかのページに移動できます。
- *My Oracle Support* にアクセスできない場合 – 82 ページの「[入手可能なソフトウェアリリースパッケージ](#)」に記載された情報を参照して、目的のパッケージを確認し、最新のソフトウェアリリース向けのパッケージをリクエストします。
- 出荷情報を手元に用意します。リクエストの際に、連絡先、電話番号、電子メールアドレス、会社名、および出荷先住所を入力する必要があります。

▼ 物理メディアのリクエスト (オンライン)

始める前に リクエストを行う前に、85 ページの「[物理メディアのリクエスト用の情報を収集する](#)」に記載の情報を収集してください。

- 1 次の Web サイトにアクセスします:<http://support.oracle.com>。
- 2 **My Oracle Support** にサインインします。
- 3 ページの右上の「問合せ先」リンクをクリックします。
- 4 「リクエストの説明」セクションに、次の情報を入力します。
 - a. 「リクエスト・カテゴリ」ドロップダウンメニューで、次を選択します。
ソフトウェアおよび OS メディアリクエスト
 - b. 「リクエスト・サマリー」フィールドに、「**Sun Server X2-4** の最新ソフトウェアリリースの **PMR**」と入力します。
- 5 「リクエスト詳細」セクションで、次の表に示されている質問に回答します。

質問	回答
メディアの入手をご希望ですか。	はい
どちらの製品ラインのメディアをご希望でしょうか。	Sun 製品
パッチをダウンロードするためのパスワードに関する問い合わせでしょうか。	いいえ
CDやDVDでパッチをご希望ですか。	はい
パッチをCDやDVDでご希望の場合、パッチの番号、OSとプラットフォームをお知らせください。	希望するソフトウェアリリースのダウンロードごとに、パッチ番号を入力してください。
ご希望の製品名とバージョンをお知らせください。	製品名: Sun Server X2-4 バージョン: 最新のソフトウェアリリース番号
希望されているメディアのOSとプラットフォームをお知らせください。	OS固有のダウンロードをリクエストする場合は、ここでOSを指定します。システムファームウェアのみをリクエストする場合は、「一般」と入力します。
メディアに言語は必要ですか。	いいえ

- 6 出荷先担当者の連絡先、電話番号、電子メールアドレス、会社名、および出荷先住所の情報を入力します。
- 7 「次へ」をクリックします。
- 8 「ファイルのアップロード」の「関連ファイル」画面で「次へ」をクリックします。
情報を指定する必要はありません。
- 9 「関連ナレッジ」画面で、リクエストに該当するナレッジ記事を確認します。
- 10 「送信」をクリックします。

▼ 物理メディアのリクエスト(電話)

始める前に リクエストを行う前に、[85 ページの「物理メディアのリクエスト用の情報を収集する」](#)に記載の情報を収集してください。

- 1 次の **Oracle Global Customer Support Contacts Directory** にある該当する番号を使用して、**Oracle** サポートに電話をかけます。

<http://www.oracle.com/us/support/contact-068555.html>

- 2 **Oracle** サポート部門に、**Sun Server X2-4** の物理メディアのリクエスト (PMR) を行いたい旨を知らせます。
 - My Oracle Support から特定のソフトウェアリリースおよびパッチ番号の情報にアクセスできる場合は、この情報をサポート担当者に伝えます。
 - ソフトウェアのリリース情報にアクセスできない場合は、**Sun Server X2-4** の最新のソフトウェアリリースをリクエストします。

更新のインストール

次のセクションでは、ファームウェアとソフトウェアの更新のインストールに関する情報を提供します。

- [87 ページの「ファームウェアのインストール」](#)
- [88 ページの「ハードウェアドライバと OS ツールのインストール」](#)

ファームウェアのインストール

更新されたファームウェアは、次のいずれかの方法でインストールできます。

- **Oracle Hardware Installation Assistant** – Oracle Hardware Installation Assistant は Oracle から最新のファームウェアをダウンロードし、インストールできます。
- Oracle Hardware Installation Assistant の詳細については、『Oracle Hardware Installation Assistant 2.5 ユーザーガイド x86 サーバー版』(<http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=hia>) を参照してください。
- **Oracle Enterprise Manager Ops Center** – Ops Center Enterprise Controller では、Oracle から自動的に最新のファームウェアをダウンロードするか、Enterprise Controller 内にファームウェアを手動でロードできます。どちらの場合も、Ops Center が 1 つ以上のサーバー、ブレード、またはブレードシャーシ上にファームウェアをインストールできます。

詳細は、<http://www.oracle.com/us/products/enterprise-manager/044497.html> を参照してください。

- **Oracle Hardware Management Pack** – Oracle Hardware Management Pack 内の fwupdate CLI ツールを使用すると、システム内部のファームウェアを更新できます。

詳細は、<http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=ohmp> で Oracle Hardware Management Pack ドキュメントライブラリを参照してください。

- **Oracle ILOM** – Oracle ILOM および BIOS ファームウェアは、Oracle ILOM Web インタフェースまたはコマンド行インタフェースを使用して更新可能な唯一のファームウェアです。

詳細は、<http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=ilom30> の Oracle Lights Out Manager (ILOM) 3.0 ドキュメントライブラリを参照してください

Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.1 のドキュメントライブラリは <http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=ilom31> でアクセスできます。

ハードウェアドライバと **OS** ツールのインストール

Oracle Hardware Management Pack などの、更新されたハードウェアドライバおよびオペレーティングシステム (OS) 関連のツールは、次のいずれかを使用してインストールできます。

- **Oracle Enterprise Manager Ops Center**

詳細は、<http://www.oracle.com/us/products/enterprise-manager/044497.html> を参照してください。

- JumpStart、KickStart、サードパーティーのツールなどの、その他の配備メカニズム。

詳細は、オペレーティングシステムのドキュメントを参照してください。

索引

A

AC OK LED, 位置, 16

E

Ethernet ケーブル, 接続, 42

O

Oracle ILOM SP

初回セットアップと構成, 45

接続, 45

デフォルトのユーザー名とパスワード, 46, 47

Oracle Solaris OS インストール済みソフト

ウェア, 59

Oracle Solaris OS、インストール済みソフトウェア
の構成, 61, 65

Oracle Solaris インストール済み OS, RAID デフォルト
構成, 61

S

SER MGT/RJ-45 ポート, 位置, 42

SP NET MGT Ethernet ポート, 42

い

一覧表, パッケージ内容, 13

インストール済み, Oracle Solaris、構成, 59

インストール済みオペレーティングシステム,
Oracle Solaris、構成, 61

インストール済みのオペレーティングシステム,
Oracle VM、構成, 74

お

オプション, サーバーコンポーネント, 14

オペレーティングシステム

Oracle Solaris OS

インストール済みソフトウェアの構成, 59,
61

再インストール, 72

ダウンロード, 72

ユーザードキュメントの場所, 71

Oracle VM、インストール済みソフトウェアの
構成, 74

か

外部ケーブル, 接続, 42

環境要件, 20

き

ギガビット Ethernet (LAN) コネクタ, 42

け

ケーブル管理アーム (CMA)

動作の確認, 40

取り付け, 35

ケーブルフックとループストラップ, 取り付け, 38

こ

固定部品, 取り付け, 27

さ

サーバー, 電源の切断手順, 56

サーバーの開梱, 13

サーバーの主電源, オフにする, 56

サーバーのラック内への取り付け, 23

し

システムステータス LED, 位置, 16

シャーシ, 位置決め用ピン, 27

仕様

環境, 20

電気, 19

物理, 19

シリアル接続, Oracle ILOM へのログイン, 47

シリアルヌルモデムケーブル, 接続, 42

す

スライドレール, 動作の確認, 40

スライドレール構成部品, 26, 29

スライドレールの取り付け, ボルト止めスライド
レール構成部品, 26-27

せ

静電気防止アースストラップ, 14

静電放電 (ESD), 14

接続, Oracle ILOM へのログイン, 47

設置タスクのチェックリスト, 12-13

つ

ツールおよび装置, サーバーの設置に必要, 11

て

電気仕様, 19

電源 OK LED, 位置, 16

電源ケーブル, 42

接続, 42

電源障害 LED, 位置, 16

電子部品, 静電気による損傷からの保護, 14

転倒防止バー, 31

電力消費数, 意味, 19

は

バックパネル

部品

Sun Server X2-4, 15

バックパネルのポートとコネクタ

位置

Sun Server X2-4, 16, 42

発送箱, 内容, 13

ふ

ファンモジュール保守要求 LED, 位置, 15

物理仕様, 19

フロントパネル

機能と部品

Sun Server X2-4, 14

コントロール

場所, 43

ほ

ポート

SER MGT/RJ-45, 42

SP NET MGT Ethernet, 42

よ

予防策, 14

ら

ラックの互換性, 確認, 24-25

ラックへの取り付け, 23

ラックマウント

CMA スライドレールコネクタ, 36

キット, 23

ケーブルの取り付け, 38

ケーブルフックとループストラップ

取り付け, 38

スライドレールストップ

解放, 40

転倒防止バー, 31

取り付け穴, 29

取り付けピン, 29

レール構成部品, 23

れ

レール構成部品, 23

